OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多民族国家における国家語の役割 : タンザニアのスワヒリ語の場合
Author(s)	竹村, 景子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1993, 4, p. 34-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

多民族国家における国家語の役割

— タンザニアのスワヒリ語の場合 —

竹 村 景 子

【はじめに】

多民族、多言語国家では、数ある民族諸言語の中から限られた数の言語を選択し、近代国家としての統一を推進する一つの手段としての、「国家語」[1]及び「公用語」[2]を決定するということが、極めて困難な問題となっている。特に、サハラ以南アフリカ、いわゆるブラック・アフリカの諸国は、植民地時代、そして植民地時代から解放された独立後を通じてこの問題に直面し、今なお多くの国が悩み続けている。

タンザニアは、そのようなブラック・アフリカの諸国の中で、ケニア(スワヒリ語)、ソマリア(ソマリ語)、エチオピア(アムハラ語)などの国々と並び、アフリカ固有の言語を国家語として選択し、その言語政策が成功している国だと言われている。[3]次の見解はそれを裏付けるものであろう。「英語ではなくスワヒリ語こそ、タンザニアの国語である。ケニア及びウガンダでは、タンザニアに比べてはるかに、まだ英語に対する評価が高いようであり、社会的地位の上昇にも英語が不可欠である。タンザニアは、どの国よりも決然としてスワヒリ語の発展に心を砕き、この20年間の政策を堅持した。…しかもこのことばは、間違いなくそれほど遠からぬうちに、近代国家国語に不可欠な意志疎通手段としての役割を十分に果たせるようになるものと思われる。つまりタンザニアは、効果的言語計画の好例となったわけである。」[4]

しかし、本当にタンザニアでは言語政策が成功しているのであろうか。独立後、国家統一の手段としてのスワヒリ語の発展と促進に、一貫して並々ならぬ力を注いできたとは言うが、いまだに未解決の問題を抱えているという事実は否めないのである。その問題とは何か — まず、セカンダリースクール（日本の中学校と高等学校を合わせた学校；以下ＳＳ）以上の教育機関での教授用言語の問題がある。小学校では教授用言語としてスワヒリ語を使用しているのに対し、ＳＳ以上では英語（但し、一教科としてのスワヒリ語と政治

教育においては、その教授用言語はスワヒリ語である。）を使用するという体制が、再三にわたって議論の対象となり、教育者や言語学者の多くが、ＳＳ以上での全教科の教授用言語を、早期に英語からスワヒリ語へ転換するよう指摘しているにも関わらず、政府は着手しようとしていない。また、学術専門用語の問題も長きにわたってかなり議論の対象となっている。英語に比べて、様々な分野の学術研究や特殊技術の用語が、極端に不足しているというのが一般的であり、このことが、ＳＳ以上の教育機関での教授用言語の転換に、ストップをかける要因になっているのである。更に、これらの問題を包括する意味で、近年「英語かスワヒリ語かの論争」が熱を帯びている。[5] それぞれの立場からの意見は、いずれも、近代国家としてのタンザニアの発展と言語問題の切り離しがたい関係に着目したものであると思われる。そして、今や国家語としての地位を固めつつあるスワヒリ語と他の民族諸言語[6] との関係も忘れてはならない問題である。

以上のことから、この論文の目的は、タンザニアの言語政策の歴史を追いながら現在の諸問題を多角度から分析し、国家語としてのスワヒリ語の立場を明らかにしていくことである。

【第一章】標準語の成立過程

（第１節）内陸部への拡大と発展 ── 植民地時代前

スワヒリ語の起源についてはまだ実証性のある説が確立されていない。ただ、「スワヒリ」という名が元来アラビア語の sahil(海岸) に由来していることからも推測できるが、東アフリカ一帯におけるアラビア地方との交易及びアラビア(特にオマーン)の支配と、スワヒリ語の形成と発展は大きく関係している。７世紀の初頭には、かなり多くのアラブ人が沿岸交易や移住のために渡来したが、当然その際には土着のアフリカ人との共通語が必要とされた。そして、おそらく様々なバンツー諸語が話されていた中で、主としてアラビア語、ペルシャ語、更にはヒンディー語などの影響を受けた言語が、その共通語の役割を果たすようになっていったのであろう。それが、現在のスワヒリ語の「古語」(スワヒリ語ではKi-Ngozi、またはKi-Ngoviと呼んでいる)にあたる言語に発展していったことが推測される。「スワヒリ

古語」はその後何世紀かを経て、いくつもの方言に分裂しながらアフリカ東海岸一帯に広まった。現在、スワヒリ語が話されているのは、国家語となっているケニア、タンザニアはもちろんのこと、ウガンダ、ザイール東部、ザンビア、モザンビーク、ルワンダ、ブルンジ、コモロ諸島、マダガスカル島北部、そしてソマリアの一部にまで及ぶ国と地域である。それぞれの地域で話されているスワヒリ語は、その方言分裂の結果、文法や語彙、音韻等の細かい面で違いが見られるが、お互いに理解し合えないほどになってしまってはいない。ただ、特筆すべき点は、それぞれに近隣の諸民族語や、植民地時代の旧宗主国語の影響を受けているということである。

スワヒリ語の各方言群は、その抱えていた人口がどれもそれほど大きくなかったことから、一つの大きな方言が他の方言群を支配していくという形態にはなり得なかった。従って、植民地時代を経て、スワヒリ語が「国家語」に制定されるまでの過程、特に「標準スワヒリ語」の成立に対する疑問が出てくるであろう。スワヒリ語では'Kiswahili Sanifu'と呼ばれる標準スワヒリ語は、実は、スワヒリ語を母語とする人々の手にはよらない、外的な強制力によって支配された言葉であり、今現在でも、その在り方に問題があるという意見が出されている。一般的には'Kiunguja'（ザンジバル都市部方言）を土台としたと言われているが、文法的にも、語彙的にも、ザンジバル都市部方言とは異なる面が多々見受けられるのである。ここでは、こうした「標準スワヒリ語」の成立と性格について、歴史的な事実を追っていきながら考察してみたい。

W.H.Whiteleyは、その著書である“Swahili－The Rise of a National Language”の中で、次のように述べている。

> 海岸部から内陸部へのスワヒリ語の拡大には、二つの段階があった。第一段階は、約1800年から1850年にかけての時期で、この時期に、「大陸側」は隊商によって次第に開かれていったのであるが、その隊商が取引の際に使用していたのがスワヒリ語なのである。第二段階は、1850年頃から、植民地支配が始まる前までで、この時期にはスワヒリ語の最初の体系的な研究が行なわれ、また、その他のアフリカの言語を学ぶ際の基本となったのである。[1]

このWhiteleyが第一段階としている時期には、タンガニーカの沿岸地方一帯、特にバガモヨなどは、数多くの隊商の奥地へ向かう出発点となっていた。象牙、竜ぜん香、コーパル、獣皮などに対する需要が増大し、奥地の交易ルートの開発が不可避のものとなった。それ

まではスワヒリ語は沿岸交易の際の媒介言語として通用していたが、内陸へのルートが発展していくにつれて、ザンジバルが重要な交易の中心地だったことなどから、隊商にとっては、なくてはならない言語になったのである。「初期の（隊商のことを記述した）話の中には、スワヒリ語の使用に関する直接的な記述はないが、普通、隊商の中には、必ずコースト出身のスワヒリ語を話す者が何人か含まれていたということがわかる」[2]ので、この頃既に、スワヒリ語は奥地へ浸透しつつあったと言える。

スワヒリ語が他の土着言語に比べて、群を抜いて拡大していったのは、もちろんその方言群の広がりや、隊商の使用言語になったことが大きな要因であるが、Whiteleyの言う第二段階での、体系的な研究というものが、その後の発展に大きく貢献しているのである。1840年代後半までには、様々な研究を通して、ヨーロッパのスワヒリ語に対する知識は、体系的に拡大されつつあった。その研究の中心となったのは、当時キリスト教布教活動に赴いていたミッションである。英国国教派(Church Missionary Society;ＣＭＳ)のJ.L. Krapfは、1850年にドイツのチュービンゲンで、"Outline of the Elements of the Kisuaheli Language with Special Reference to the Kinika Dialect"を出版している。ＣＭＳの本拠地はモンバサであり、いずれはケニア全土にキリスト教を布教したいと考えていたようであり、それに付随して、スワヒリ語（特にモンバサ方言）も広まっていくはずであったのだが、ケニアの場合は、タンザニアの隊商ルートの拡大の場合と状況が異なり、マサイ人による襲撃や、アラブ商人との交易以前からのカンバ人による商業活動などが常にあったため、奥地での拠点が余りなく、思うように伝道事業を拡大することはできず、従ってスワヒリ語の広まりも主に海岸地方に限られてしまった。[3]しかし、Krapf は、既述の著書に続いて、初のモンバサ方言の辞書も編集して(1882年)おり、その功績は大きい。ＣＭＳと並んで言及されるべきミッションは、中央アフリカ諸大学連合ミッション(Universities Mission to Central Africa；ＵＭＣＡ)である。このミッションは1864年にザンジバルに本拠地を置き、ザンジバル方言の資料収集や研究に従事した。1870年には、A.E.Steereが"A Handbook of the Swahili Language as spoken at Zanzibar"という初のザンジバル方言の文法書を著している。また、多くの宗教関係の書物をザンジバル方言で記述するということも行なっており、更には、Steereの後を受け継いで、A.Madan が初の"English-Swahili Dictionary"(1894年)と"Swahili-English Dictionary"(1903年)の編集に従事したのである。[4]

Steereはスワヒリ語以外の土着言語にも研究の価値があるとして、ニャムウェジ語、シャンバラ語、ヤオ語などの研究も手掛けているのだが、その中でもスワヒリ語の拡大を確認し、その研究を重視していたということを裏付ける言葉がある。

> スワヒリ語ほど広く知られているアフリカの言語はおそらくないであろう。この言葉は、マダガスカルからアラビアに及ぶ海岸地方で理解され、インドのシーディーの人々[5]によって話され、更に中央・熱帯アフリカの非常に広い地方での、交易上の媒介言語にもなっている。ザンジバルの貿易商たちは、時には大陸の西側にまでも到達することもあり、（そこまで行かなくとも）たいていは大陸の中ほどまでは、インドやヨーロッパの商品を携えて行くのである。この広大な範囲において、スワヒリ語に精通していれば誰でも、それを理解してくれる者、あるいはその通訳を見つけることが可能である。こう考えれば、スワヒリ語を徹底的に研究し、習得することが、ＵＭＣＡにとって非常に重要であることがわかる。[6]

ＣＭＳもＵＭＣＡも、本拠地とした場所に違いはあるにせよ、それぞれの地域の主要方言の研究を重視し、内陸部にも拠点をいくつか置くことによって、スワヒリ語の拡大と発展に多大な影響を与えたのである。[7]後に、スワヒリ語の標準語が定められる時、この二つのミッションの推す方言が、標準語の基になるべく争ったことは、早くもこの時期からの布石によるものである。また、同様に内陸部へのスワヒリ語の拡大を早める大きな要因となったのは、この時期精力的に活動していた隊商の働きである。特に、Hamed bin Muhammed、通称Tippu Tipのコンゴ遠征などにより、後に'Kingwana'と呼ばれることになる、スワヒリ語コンゴ方言の基礎ができあがったことは、注目に値すると思われる。

こうして、それまでは東アフリカ海岸部の言語であったスワヒリ語が、広く内陸部にまで浸透し、植民地となる以前に、リンガフランカとしての第一歩を踏み出したのである。但し、既述のように、タンザニアとケニアではその拡大と発展に次第に違いが見られるようになる。それは、隊商ルートの延長に対する妨害、交易に携わっていた民族の特徴の違い[8]、また、ミッションの布教拠点の設置の違いなどが要因ではあるが、このことが、現在のタンザニアとケニアでのスワヒリ語の浸透度の違いを引き起こす、最初の要因になっていると言えよう。

（第２節）植民地期における宗主国の対応 ── ケニアとの比較から

スワヒリ語が商業的リンガフランカとしての第一歩を踏み出した頃、ベルリン会議での決定により、タンガニーカ及びザンジバルはドイツ領東アフリカに含まれることになった。支配者としてやって来たドイツ人たちは、ミッションのようにスワヒリ語で書物を書き著したり、スワヒリ語そのものを研究したりすることには従事せず、支配のための言語として使用することに力を入れていた。従って、下級役人に至るまでスワヒリ語は必ず理解されねばならない言語となり、スワヒリ語はドイツの目指した統治形態の媒介言語として、これまでとは違った側面を持つようになったのである。

研究に積極的ではなかったとは言え、行政運用言語としてのスワヒリ語を定着させるべく、行政府はその普及に力を入れていたこともあって、この時期、スワヒリ語の通用地域の拡大は更に進んだと言える。また、Whiteleyの分類で第二段階とされた時期に引き続き、この時期にも優れた研究者が存在した。優れた研究者とは、C.Veltenや C.Büttner、A.Seidelなどであり、彼らは自らの研究[1]のかたわら、ベルリンでのオリエンタルセミナーのテキスト作成も行なった。植民地総督の中には、スワヒリ語を進んで話す者や、そのベルリンでのセミナーに出席したりする者もいた。行政をスワヒリ語で行なうということは、下級役人として最低限の人材を確保せねばならないということであったから、学校の設立とスワヒリ語による教育が推進された。1893年に、下級役人を育成するための学校がタンガに設立された。1903年までには、政府運営の小学校が８校、地方行政区運営の小学校が12校、ミッション経営の小学校が15校設立されている。1911年までには、ミッション経営の小学校では三万人に及ぶ小学校児童を教育しており、児童数の増加に伴いテキストなども量産されていた。[2] また、ＵＭＣＡは新聞の発行にも力を注いでおり、1888年には'Msimulizi'[3]を、1894年には'Habari za Mwezi'[4]を発行している。この活動も、1910年にはドイツプロテスタントミッションが引き継ぐ形で、月刊の'Pwani na Bara' を発行するに至った。1914年には、発行部数が2000部にものぼっている。[5] 1914年までには、植民地行政府と各村落との通信業務は、全てスワヒリ語で行なえるようになっており、行政府に対して、スワヒリ語もしくはドイツ語で通信文を書かないようなことがあれば、それは無知だとみなされても仕方のないことと思われるまでになっていた。[6]

第一次世界大戦でドイツが敗れたことにより、タンガニーカ及びザンジバルは、イギリス領東アフリカに組み込まれることになった。イギリス領となってからも、スワヒリ語を行政や教育で使用する政策に変わりはなかった。実際、ドイツが進めた政策を、イギリス

は成功していると認めているふしがあり、それは次のような言葉に表れている。

…(統治期間) 後半のドイツの政策により、全てのアキダ(akida)[7]と村長との、スワヒリ語による相互通信が可能となっている。[8]

これは1921年に出された植民地行政府への報告書の中の一文であるが、タンガニーカの植民地総督が、スワヒリ語で書かれた下級役人からの報告書の受取、相互の情報交換が可能であることを述べ、イギリス人に対して、統治におけるスワヒリ語の重要性を知らしめているのである。[9]支配と搾取を完璧に実行するためには、植民地全体にスワヒリ語を浸透させることが肝要であると考えたのである。

しかし、ドイツ領時代と明らかに異なっていたのは、その使用範囲を徹底的に低レベルに押し留めたということである。イギリスは、ドイツのように行政の全ての段階でスワヒリ語を使用するのではなく、下層の人々、つまり民衆に対して行政府側から何かを伝える場合の媒介言語に限定し、上層部での使用言語は英語にする、という言語的分断政策をとっていた。また、教育においても状況は同様で、小学校での教授用言語はスワヒリ語でも、ＳＳ以上の高等教育では、英語が教授用言語だったのである。[10]この他、司法面での言語的区別も同様であり、下級裁判所での使用言語はスワヒリ語、高等裁判所での使用言語は英語といった具合であった。[11]このようなイギリスの言語政策は、後に独立の機運が高まる中で、ＴＡＮＵ(Tanganyika African National Union；タンガニーカ・アフリカ人民族同盟) が、国家統一のための手段としてのスワヒリ語の重要性を認め、その使用に積極的になるまで、スワヒリ語に対して「第二級言語」[12]というレッテルを貼ることになるのである。また、このイギリスの政策と歩調を合わせるかのように、もう一つスワヒリ語の言語的地位をおとしめる要因が存在した。既述のように、東アフリカ沿岸部一帯は数世紀にわたるアラビア地方との交易で繁栄し、それに伴ってスワヒリ語も商業言語としての地位を不動のものとしたわけだが、沿岸交易が、奴隷貿易の廃止に始まり、西欧列強諸国の台頭とアラブ人支配力の低下に伴って衰退したことにより、スワヒリ語もかつての優越性を失っていったのである。また、内陸側の人々は、スワヒリ語を海岸部の人々の言語とみなしており、そのスワヒリ地方の人々については、「奴隷貿易」にも携わる、口がうまく、信用のおけない詐欺師のような人々として軽蔑したのである。従って、スワヒリ語にも同様に軽蔑的なイメージが付加され、言語的地位がおとしめられたのである。[13]もちろんこの時期においても、様々な分野における一言語による運営が好ましく思われて

いたのも確かである[14]が、自らの母語に対する執着心の強い、いわゆる「保守的な」民族も存在していたため、それらの民族の分布の中心地となる地域でのスワヒリ語使用の広がりは、かなり遅れることとなる。[15]

このように、イギリス統治時代を通して考えた場合、スワヒリ語はタンザニアでは一応リンガフランカとして定着しつつあったものの、その言語的価値という点に着目すれば、決して好ましい状態には置かれていなかったことがわかる。とは言え、独立後の「国家語」としての普及状況からも判断できるように、同様にイギリス領であったケニアとは、やはりその拡大と発展に大きな差異があると言える。そのことを明らかにするために、ケニアのこの時期の状況を見てみることにする。

ケニアもタンザニアと同様、その海岸部一帯は、いわゆるスワヒリ地方と呼ばれている地域であり、スワヒリ語を母語とする人々が生活している。第1節で述べたように、英国国教派（ＣＭＳ）が J.L.Krapfを中心として、モンバサ方言の研究に従事していたし、スワヒリ古典文学の18、19世紀の発展は、モンバサやラムの方言を抜きには語れないほどである。[16]しかし、コーストから内陸への隊商ルートが、タンザニアのようには拡大しなかったことから、リンガフランカとしてのスワヒリ語の浸透はそれほど深くはなかった。しかも、ある程度使用されていた内陸のスワヒリ語は、コーストのスワヒリ語に比べて語彙や文法の乱れが目立ち、そのことが、後にスワヒリ語を近代文明に合致しない言語とみなす原因ともなる。[17]イギリスの統治下に入った際、やはり植民地政府は、統治に有効な言語を決定し、経済、政治活動を円滑に行なおうとしたのであるが、ここでタンザニアとは違い、地元言語（土着言語）をその運用言語とするよう求める声が上がったのである。1906年に、当時の植民者協会会長であったチャールズ・エリオット卿が、行政を円滑に進めるために土着言語を学ぶことの重要性を説いている。「…私の考えでは、地方行政を発達させ、いまだに疎遠で打ち解けない部族民(原文ママ)との親密な交流をはかるには、より広い地元言語の知識は欠かせないものです。一般的には、多くの官吏は、多くのヨーロッパ人がフランス語を理解するのと同様に、内陸部の多くの土着民によって理解される、保護領のリンガフランカであるスワヒリ語しか知りません。しかし、もっと重要な地元首長は、一般的に自分たちの母語以外は理解できないのです。…」[18]一方ミッション側は、キリスト教文献をアフリカ人が独力で読めるようにするために、読み書きを教える必要があるとし、そのための教授用言語の決定を要求していた。[19]1909年には、ナイロビで

連合ミッション会議が開催され、初等教育の教授用言語をスワヒリ語と英語のどちらにするかを討議した。[20]「この会合での決議は、植民地政府に、今後どの言語がリンガフランカとして使用されることになるのかを尋ねる覚書を送るというもの」[21]であったが、政府はその後20年間回答を先送りにした[22]ままにし、1929年にようやく文部省が次のような決定を打ち出したのである。「できる限り早いうちに、英語を植民地内のリンガフランカとして確立させることが、政府の方針である。」[23]「土着言語は、初等教育４年生までは（教授用言語として）使用されることになる。」[24]この決定により、一旦はスワヒリ語が公式的には排除される形となったのだが、それぞれ異なる理由から、「宣教師たちも入植者たちも、英語がケニアのリンガフランカになることに反対した」[25]のだった。宣教師側の主張は、「東アフリカの大多数の人々にとって自然なリンガフランカはスワヒリ語であり、それが英語にとって代わられることは認められない」[26]ということであった。それに対して入植者側は、「英語は政治の道具であり、アフリカ人には使わせるべきではない。アフリカ人に英語を教えれば、労働組合運動や共産主義、その他の左翼運動を生じる結果になる」[27]と主張したのだった。

この後、英語を推す行政側とスワヒリ語を推す入植者側の対立は続いたが、結局は入植者側の主張が通り、ケニアでは1940年代までは、スワヒリ語がアフリカ人学校の教授用言語として使用されていたのである。しかし、第二次世界大戦後、インドやパキスタンの独立などに影響されて、ケニアでも独立に向けての動きが起こり始めた頃、教育の機会均等を目指し、アフリカ人学校の教育状況を調査する委員会の報告を基にして、教育改革が行なわれた。この改革は、独立後の状況を鑑みて、アフリカ人エリートを養成しようという政治的思惑に影響されたものであった。これにより、1950年からは、小学校１～４年では母語を教授用言語とし、３、４年では英語も一教科として教えられるようになり、４学年の末の小学校卒業資格認定試験に合格すると、全てを英語で教える中学校に入学することになったのである。[28]この間、スワヒリ語は、「言語の異なる人々が集まる町や入植地域(ヨーロッパ人農場地域)などで使用される」[29]だけになってしまったのである。

同じ植民地でありながら、ケニアとタンザニアでは、様々な要因が重なって、イギリスの政策が異なったために、独立後の「国家語」問題に差異が出てくることになったことが、以上のことからも明らかであろう。タンザニアで、一貫してスワヒリ語がリンガフランカとして使用されていた頃、ケニアでは植民地政府の政策が二転三転し、しかも、英語ばか

りか土着言語との競合もあり、なかなか定着することができなかったのである。タンザニアにおいても、先述のように、スワヒリ語以外の民族諸言語の権利を主張する民族も存在したが、ケニアに比べて早くからスワヒリ語が浸透していたこと、そして、今まで述べてきた政策の違いによって、更にその浸透度に大きな差が表われたのである。ここで注目しておくべきことは、この浸透の差をもたらす根底には、「民族」の人口問題があるということである。国勢調査の実施年が異なるが、次にあげるケニアとタンザニアの人口統計表から、旧宗主国の政策を、いわば裏付ける要因となってしまった「民族」の力が推測できるのではないだろうか。

《表一－１》

ケニアの各言語話者数（1979年の国勢調査による。）[30]

（バンツー語族）

Gikuyu	3,202,821	Taita	153,119
Luhya	2,119,708	Kuria	89,169
Kamba	1,725,569	Mbere	61,725
Kisii	944,087	Pokomo	39,741
Meru	840,504	Bajun	36,971
Mijikenda	732,830	Tharaka	9,682
Embu	180,400	Taveta	7,676
		Swahili/Shiraz	5,646
		Total Bantu	10,149,648

（非バンツー語族）

Luo	1,955,845	Orma	32,127
Kalenjin	1,652,243	Gabbra	30,553
Masai	241,395	Ogaden	25,642
Turkana	207,249	Ajuran	22,006
Somali	155,694	Rendille	21,794
Teso	132,487	Njemps	7,546
Degodia	93,035	Nderobo*	7,200
Gurreh	83,083	Boni/Sanye	4,170

Samburu	73,625	Gosha	1,852
Boran	68,894	Sakuye	1,824
Basuba	59,668	Hawiyah	1,604
		Elmolo	538
		Total Non-Bantu	4,880,074

☆この表記については揺れがあり、'Dorobo'と表記している資料も存在する。(《表一－2》の、タンザニアの(非バンツー語族)の方を参照されたい。)

《表一－2》

タンザニアの各言語話者数(1957年の国勢調査による。)[31]

(バンツー語族)

Sukuma	1,093,767	Ha	289,792	Shambara	193,802
Nyamwezi	363,258	Hehe	251,624	Zalamo	183,260
Makonde	333,897	Nyakyusa	219,678	Nilyamba	156,498
Haya	325,539	Lugulu	202,297	Yao	144,198
Chaga	318,167	Bena	195,802	Mwera	138,210
Gogo	299,417	Nyaturu	195,709	Zigua	134,406
Pare	126,048	Kwaya	40,824	Rungu	13,751
Makua	123,316	Kwere	39,199	Ndonde	13,165
Nyika★	122,233	Meru	35,814	Ngurimi	12,988
Langi	110,292	Ruanda	35,175	Isanzu	12,964
Ngindo	88,397	Digo	35,134	Vidunda	12,771
Kagulu	86,936	Nyika★	34,760	Mbunga	11,682
Jita	86,712	Nyamwanga	34,706	Swahili	11,590
Fipa	86,462	Regi	34,417	Segeju	11,575
Kuria	85,090	Bondei	32,118	Pimbwe	11,479
Rufiji	79,498	Ndendeule	31,713	Bemba	11,438
Sumbwa	76,435	Saghala	31,609	Ikizu	11,229
Pogolu	74,047	Kimbu	31,149	Congo	11,153

Pangwa	70,721	Sango	29,889	Kamba	10,865
Ngoni	68,223	Tusi	28,138	Doe	9,734
Nyasa	65,514	Manyema	26,878	Wanda	9,477
Kinga	65,467	Shashi◆	25,691	Ganda	9,459
Safwa	63,027	Mambwe	25,115	Tongwe	8,746
Shubi	61,384	Zanaki	24,864	Bende	7,792
Hangaza	59,916	Wanji	24,283	Shirazi	7,176
Ndali	59,650	Ndamba	21,951	Rungwa	7,158
Matengo	59,647	Malila	20,745	Shashi◆	7,100
Zinza	55,187	Konongo	20,479	Mbugwe	6,463
Nyika★	54,384	Iambi	20,075	Ikoma	6,131
Ngulu	52,877	Mavia	19,906	Matumbi	6,092
Rongo	52,721	Kutu	18,085	Kisi	5,291
Matumbi	44,717	Lambya	15,803	Jiji	4,653
Ndengeleko	43,443	Wungu	14,926	Sonjo	4,593
Kerewe	41,601	Machinga	14,224	Vinza	4,135
				Total Bantu	8,130,586

★三つの'Nyika'についてであるが、まずその中の二つは、'Nyiha'の二つの分派を指している。一つはルクヮ湖の南に位置するウフィパで話されている言語であり、もう一つはムベヤ地域のムボジ県で話されている。(表中のいずれの'Nyika'がどちらであるかは不明である。) 更に'Nyika'は、その発祥地がマラウィであるとされる Fungwe、Wenya、Tamboと近接した、Tumbukaのサブグループに属する言語を指すとも言えるし、あるいは、ケニア、タンザニアの国境にまたがるDigoを含む、ケニア南部の海岸線に定住する部族〈原文ママ〉の言語であるとも言える。[32]

◆二つの'Shashi'は、当然同一の言語を指しており、'Zanaki'グループに属す'Sizaki'としても知られる言語である。[33]

(非バンツー語族)

Iraqw	135,142	Barabaig	30,599	Burungi	12,408
Luo	82,876	Sandawe	28,309	Gorowa	11,973

Arusha	68,370	Wasi	13,996	Taturu	11,372
Maasai	62,180	Mbugu	12,604	Kwavi	7,378
				Dorobo	1,868
				Total Non-Bantu	479,075

以上の表から、(国勢調査の実施年が異なることを考慮しなければ)少なくとも次のようなことが言える。１．ケニアとタンザニアでは、バンツー語族と非バンツー語族の割合が全く異なり、ケニアでは非バンツー語族がバンツー語族の約48％の人口を占めるのに対し、タンザニアでは６％にも満たない。２．ケニアでは、100万を超す人口を持つ主要民族がいくつか存在するのに対し、タンザニアでは、100万人を超すのは最も多いスクマのみである。３．ケニアで最大人口を抱える民族はギクユであるが、第二位のルヒアの212万人と第三位のルオの195万人を足すと、そのギクユの320万人を超えてしまう。４．最大人口を擁する民族の全人口に対する割合は、ケニアではギクユが約21％であるが、タンザニアでは、スクマが約13％であるにすぎない。これらのことを総合すると、植民地政策に直接的に作用したとは断言できないにしても、スワヒリ語を広めるのに障害となるべき伏線が、タンザニアに比べてケニアにはより明確に存在したということになろう。このことはまた、独立前の両国を解放に向けて指導した政治組織にも、大きく影響を与えることになる。[34]

（第３節）領土間言語（スワヒリ語）委員会の設立と独立前後のスワヒリ語の地位

イギリスがドイツに代わって支配を始めてまもなく、特にタンガニーカにおけるスワヒリ語の重要性が強調され、また、イギリス領東アフリカの四地域（ケニア、ウガンダ、タンガニーカ、ザンジバル）では、政策は異なるとは言え、スワヒリ語をリンガフランカとして掲げていこうとしていた[1]こともあり、その標準化が提唱されたのである。ここで、「領土間言語（スワヒリ語）委員会」が、1930年１月１日に発足することになったのである。その布石として、まず、タンガニーカの植民地総督の要請で開かれた1925年の教育会議で、スワヒリ語の標準化についての答申が持ち出され、次いで1926年には、その綴り字法や単語の分ち書きに関する多くの提案が出され、1928年６月には、ケニアのモンバサに

おいて、領土間会議が開かれている。この会議には、国際アフリカ言語文化研究所のMeinhof 教授も参加していた。この席上、スワヒリ語を標準化するにあたり、これまで教授用言語として発展していくには障害であると考えられていた様々な問題、例えば先ほど挙げた綴り字法や単語の分ち書きなどといった、いわゆる「正書法」の問題を解決するために、基準となる方言を選択することが、第一の課題となった。ここにおいて、第１節で述べた二方言の争いが表面化するのである。ＣＭＳはモンバサ方言を推し、ＵＭＣＡはザンジバル方言を推すのである。結局は、ＵＭＣＡの推すザンジバル方言が、標準スワヒリ語の基準として選択されたのであるが、この会議の結果は、後々まで影響を及ぼすことになる。Whiteleyは、モンバサ方言が選択されなかったことについて、次のような見解を示している。

…30年代、40年代には、モンバサ方言は、分離主義的且つ保守主義的な傾向に結びついていた。このことは、二重に不幸なことである。モンバサ及び北方海岸部の、豊かな歴史的、文学的伝統が、イスラムとの繋がりと相俟って、ケニアの他地域(民族)とは、ほとんど何の関係もないように思われていたのである。そして、その他地域においては、タンガニーカのスワヒリ語の方を認める傾向が強かったのである。しかし、南方海岸部は北方のような伝統もなく、タンガニーカとケニアの両方で、学校の授業科目において、それらの伝統を教えるという内容が欠けていたことにより、数世代にわたってスワヒリ語の授業は貧困化された。ところがこれに反して、タンガニーカの内陸側の、かなり広範囲において使用されているスワヒリ語の一種類と非常に近似した方言を採択したことで、その方言は（標準語の基として）急速に人々の間で認められることになったのである。[2]

ザンジバル方言が採択された後、1929年には、四地域の政府が一体となって進める言語委員会の設置要求が出され、ついに翌1930年に、既述の通り「領土間言語（スワヒリ語）委員会」が発足したのである。この委員会の主目的は、「スワヒリ語の標準化と発展を促進すること」[3]であったが、具体的な方針は次のように定められていた。

（１）正書法を標準化し、領土間で完全な承認を得ること。

（２）学校教科書、及び辞書等の出版を統制することにより、既存あるいは新しい語彙の使用において、できる限り一貫性を保持すること。

（３）教科の標準的書物の出版を通して、文法及びシンタックスの一貫性を保持するこ

と。

(4)スワヒリ語を母語とする作家の活動を鼓舞し援助すること。

(5)これから作家になろうとする者全てに助言を与えること。

(6)既に出版されているスワヒリ語の教科書及び一般書物について、必要な箇所に改訂を行なうこと。

(7)毎年、必要とされるａ．教科書、ｂ．一般書物の定期刊行を行なうこと。

(8)教科書及び一般書物を選択し、それらをスワヒリ語に翻訳すること、また、そういった書物を、スワヒリ語で直接書き著わすことについての取り決めを行なうこと。

(9)スワヒリ語の教科書及び一般書物を、出版前に検閲し、また、必要な箇所への改訂を行なうこと。

(10)委員会が取り扱う全てのスワヒリ語の書物に関して、修正及び助言を行なうこと。

(11)著作家に対し、様々な分野における現実に即した教授方法の情報を提供すること。

(12)スワヒリ語及びスワヒリ文学に関する様々な問題に応答すること。

(13)上記の目的の達成のために付随する、あるいはその達成を助長すると思われる他の活動に着手すること。[4]

発足当初、17人の委員は全て白人であり、スワヒリ語を母語とする人は誰一人として含まれていなかった。その後、第二次世界大戦の混乱で、アフリカ人の委員を参加させる件については、大戦終了後の1946年まで放置されたままだった。[5]

Whiteleyは、この委員会の活動を四つの時期に分けて考えている。[6]第一期は、東アフリカ領総督会議の庇護下にあった1930～47年の18年間である。この時期には、まず、1933年からマダンの編集した辞書の改訂の作業が始められ、1939年には出版されるに至っている。[7]1935年からは、アフリカ人学校におけるスワヒリ語の作文コンクールも始められている。1939年にはスワヒリ語作家コンクール、1942年には外国人学校でも作文コンクールが始められた。[8]第二期は、東アフリカ高等弁務官の管轄下に置かれていた、1948～52年の間、第三期は、1952～62年のマケレレ大学寮時代、そして第四期は、1963年からのダルエスサラーム大学寮の時代である。

スワヒリ語の「標準化」ということが一大目標であったため、出版される書物に使用されているスワヒリ語については、かなりの注意が払われていた。目標の中の大半が、書物

の出版に関することであることからも明らかなように、委員会の決定による「統一標準スワヒリ語」の「正書法」は絶対であった。しかし、このことに関しては、「出版された本の著者の多くは、スワヒリ語を母語とする者ではなく、また、それらの本の多くは英語の本の翻訳であることが問題」[9]であり、「このことがスワヒリ語を退廃させる原因になっている。標準スワヒリ語の文法は、英語の文法の性質を帯びており、構造や統語方法まで英語的になってしまっている。もはやこのスワヒリ語には、その基となったザンジバル方言の特徴はほとんど見られない。」(下線筆者)[10]という指摘もある。学校では、標準スワヒリ語以外の方言は「誤った」スワヒリ語で、それらを使用すると「正しい」スワヒリ語になおされるのであった。こういった現象は、「標準語」を定めて広く国内、または一定地域内に浸透させる場合に必ず起こることであり、広めようとする側は、言語に優劣などつけられようはずもないことを無視して、規範に見合う言語を「正しい」言語、そうでないものを「誤った」言語としてしまうのが常である。だが、スワヒリ語については、この状況が間違っていると言う者が白人の中にもいた。ケニアの文部省の官吏の一人は、次のように述べている。

> 我々は「標準スワヒリ語」を造ったが、この過程でスワヒリ語は新しい言語に変化してしまった。もちろん、スワヒリ語が他の言語と同様に、形態、構造、語彙のどの面においても発展し、成長することは、諸外国の文化と対等のレベルにまで到達するためには、必要であることは承知している。しかし、その発展は、スワヒリ語を支える文化や精神から起こらねばならないのであって、決して表面だけを取り繕ったものであってはならない。ところが、我々が行なってきたこと、そして今なお行ない続けていることは、まさにその行なってはならないことであって、その結果、現在我々は自らを笑わねばならないような状況にいる。スワヒリ語を母語とする人々に、その言語形式、あるいは内容が、スワヒリ語ではない言語で書かれている多くの本を使用し、話されているのとはほんの少ししか似ていない言語を使用して、彼らの言語を教えているのである。要するに、我々は、現在の要求に見合ったスワヒリ語の改革ができるのは彼ら自身であること、そしてその作業を驚くほど簡単に彼らがやり遂げるという真実に、気付かないようにしているのである。[11]

これらのことから理解できるように、現在まで使用され続けている「標準スワヒリ語」は、母語とする人々の手から離れた、いわば「造られた」言語なのである。領土間言語（スワ

ヒリ語）委員会は、確かにこの言語を東アフリカ全体に広めるという功績は残したが、生身の人間の生活や文化を吸収した、民族の伝統を担う役割を果たす言語ではなく、もっと硬質なイメージを与える機械的な言語に変質させてしまったのである。しかし、皮肉なことではあるが、この過程があったことが、タンザニアでの独立後の「国語化政策」を、助長しているのではないだろうか。西洋的概念の国家における「国家語」というものを、多言語、多民族国家であるタンザニアで普及させていくには、国家に準ずる団体が管理した、「非生活語である標準語」[12]の力に頼らざるを得なかったのである。

委員会は、第三期のマケレレ大学寮に移るあたりから、少しずつその性格を変えていくことになる。1948年には東アフリカ文学局が設立されていたが、この頃からスワヒリ文学や、各方言の研究に従事し始める。マケレレ大学寮に移った1952年には、“Studies in Swahili Dialects”というスワヒリ諸方言の研究叢書も出されている。[13]また、東アフリカ文学局を始め、スワヒリ語の育成という点から、委員会をサポートする機関もいくつか設立されており、新聞やラジオ放送の発展に従事するようになっていた。[14]1963年にダルエスサラーム大学寮に移った後、1964年には、委員会は現在の「スワヒリ研究所(Taasisi ya Uchunguziwa Kiswahili)」と名称を変えて、新たにスワヒリ語の発展と育成に力を入れることになった。この時は既にタンザニアは独立を果たしており、1961年の独立時には、スワヒリ語を「国家語」として発展させることに方針を決定していたので、この研究所の担う役割は非常に大きかったのである。委員会の掲げていた目標とは別の、新しい目標が据えられたのもそのためである。その目標とは次のようなものである。

（1）スワヒリ語の発展と育成のための研究を行なうこと。

（2）スワヒリ語で書く作家を鼓舞すること。

（3）スワヒリ語の語彙を充実させ、同時に辞書の作成にも従事すること。

（4）書物を編集すること。

（5）スワヒリ語の純粋性を保持すること。

（6）役に立つ書物をスワヒリ語に翻訳すること。

（7）政府及びスワヒリ語の発展に従事する他機関と協力体制をとること。[15]

スワヒリ語の発展に従事する他機関も次々に設立されていった。タンザニアで公用語として認められた1967年には、「国語審議会(Baraza la Kiswahili la Taifa)」が、各省庁の代表者、及び個人などをメンバーとして結成された。また、1970年にダルエスサラーム大

学にスワヒリ語学科が設置され、そこでの教授用言語は全てスワヒリ語、という体制で授業が行なわれるようになった。前後するが、1963年には成人教育研究所が、1966年には教育研究所が設立され、それぞれスワヒリ語による成人教育の充実（識字率の向上）、各教育機関でのスワヒリ語の授業要綱の整備を司ることになった。

以上、領土間言語（スワヒリ語）委員会の設立から、タンザニアの独立前後のスワヒリ語に関する動きを見てきたわけだが、これらの動きは全て、標準スワヒリ語を整備していくためのものであったと言えよう。そのこと自体、国家的規模による言語の統一が必要不可欠であったタンザニアでは、言うまでもなくプラスに働いている。しかし、「特定の言語に特定の使命が付与されるとき、その言語そのものが、たとえば自由、博愛、平等の象徴となり、そのスローガンに忠誠を示す必要のある者は、また、その言語にも忠誠でなくてはならない」[16]ことからもわかるように、スワヒリ語には「国」という巨大で威圧的な概念が付加されることになったのである。しかも、実際は英語という国際語が支配的な状況であり、自らの母語に拠り所を求める保守的な民族も存在する中で、近代国家語としては余りに整備不十分なまま、重荷を背負うことになったと言っても過言ではない。標準語制定から60年余が過ぎた今、「外側から標準化されたスワヒリ語」[17]のたどってきた道を検証してみなければならないであろう。

【第二章】スワヒリ語の現在の地位

（第１節）教授用言語としてのスワヒリ語

ここでは、教授用言語としての力の推移ということに目を向け、次第に英語の勢力範囲を放逐しつつあるスワヒリ語の現状について論じていく。

既に述べてきたように、タンザニアでは、スワヒリ語を「国家語」としたのが1961年、つまり独立の年（当時はまだタンガニーカ）で、「公用語」としたのは1967年のアルーシャ宣言の年であった。植民地期の宗主国の言語政策について触れた時にも述べたが、ドイツ領時代から既にスワヒリ語は教授用言語としての地位固めがなされていた。従って、ウジャマー政策と「自助のための」教育を推進していくに当たり、何の懸念もなく、スワヒ

リ語が初等教育の教授用言語として採択されたのである。

スワヒリ語の普及に当たっては、ＴＡＮＵ(Tanganyika African National Union; タンガニーカ・アフリカ人民族同盟，現在のＣＣＭ＝Chama cha Mapinduzi、つまり革命党の前身）の果たしてきた役割が大きいと言える。ＴＡＮＵは、その前身であるＴＡＡ(Tanganyika African Association; タンガニーカ・アフリカ人連合)とは、政治的にも文化的にも一線を画している政治団体である。ＴＡＡは国家の問題を解決してゆくための明確なイデオロギーを欠いていたのに対し、ＴＡＮＵはその政治理念の柱となる次の五項目を明らかにしたのである。

（ａ）自らの政治規則で統治できる領域を確保し、国家独立のために闘うこと

（ｂ）アフリカ人の間での統一発展の妨げとなるような、部族主義等の問題と闘うこと

（ｃ）あらゆる種類の差別を廃止すること

（ｄ）労働者が労働組合を結成できるよう支援すること

（ｅ）ＴＡＮＵとその目的を同じくする他組織とも協力体制をとること[1)]

ＴＡＮＵはこれらの目的を遂行するに当たり、その手始めとして、大衆とのコミュニケーションの基盤であるスワヒリ語の普及徹底ということに力を注いだのである。そして、タンガニーカの都市部と地方の中心地全てにおいて、50年代半ばまでにスワヒリ語を政治機構での使用言語、議会等での書記言語として普及させることに成功したのだった。そのことを如実に表しているのが次の文章である。「タンガニーカのリンガフランカとしてのスワヒリ語は、ＴＡＮＵの活動を統一することにおいて重要な役割を果たした。スワヒリ語は国のほとんど全土で理解され、多くの場合、ＴＡＮＵの指導者達は、とくに国家的レベルではスワヒリ語で演説を行なった。多くの指導者がスワヒリ語に堪能で、おかげで大衆との直接的で密度の濃いコミュニケーションが保たれた(し今も保たれている)。スワヒリ語は、個々の民族グループの指導者としてよりも、むしろタンガニーカの指導者として、ＴＡＮＵの指導者を容易に大衆に受け入れさせることのできる要素だったのである。」[2)]

独立後、様々な形でスワヒリ語の発展への助長が試みられた。いくつかの公的機関でそれらは進められたわけだが、その中には後にＵＫＵＴＡ（Usanifa wa Kiswahili na Ushairi Tanzania; タンザニア・スワヒリ語標準化・スワヒリ詩歌協議会）と呼ばれる国家的規模の組織になった The Swahili Poets' Association（スワヒリ語詩人協会)や、Jumuiya ya Kustawisha Kiswahili(スワヒリ語振興協会）なども含まれている。スワヒリ

語のカリキュラムや、スワヒリ語教師の養成、授業内容等については、文部省特別委員会が司った。

1967年には、副大統領であったカワワの演説において、スワヒリ語の使用を政府でも政府に次ぐ政治団体でも更に使用強化し、英語の使用は、スワヒリ語の学術用語がまだ十分にカバーできていない分野に縮小するように、ということが言われた。この、スワヒリ語を英語以上に前面に押し出していく言語政策の基盤となるのは、やはり教育である。次にあげる表は、1980年の小学校におけるスワヒリ語のカリキュラムである。[3]

《表二－１》

学　　年	I	II	III	IV	V	VI	VII
スワヒリ語の時間数／週	9	9	13	7	6	5	5

小学校ではスワヒリ語が一教科として教えられ、そして教授用言語としても使用されている（1967年より実施）。ウジャマー政策と「自助のための」教育を推進するために、政府はまず小学校教育において、「国家語」に対する基礎知識を子供達に植え付けることを目標としている。スワヒリ語は教授用言語であると同時に、多くの子供達にとっては初めての書記言語でもある。再三述べているように、タンザニアは多民族国家であり、その中でスワヒリ語を母語としている国民の数は、わずかに10％ほどである。[4] この言語状況下で、母語を異にする多くの子供達にスワヒリ語を習得させ、さらには教授用言語として使用させるには、かなり精緻な指導要綱が必要となる。また、教師やテキストの充足ということも大きな問題となる。英語に比べて、テキストの充足という点では、従来からかなりの欠陥が指摘されてきた。しかし、現在では小学校においては、英語を除く全ての教科でスワヒリ語が教授用言語になっており、算術、地理、歴史、政治教育などの分野の教科書は、十分その価値が認められるほどのレベルに達している。スワヒリ語を母語としない多くの子供達にとっては、例えば発音面で、[θ]や[ð]などの音を発音しにくいという不利な点のある民族もあり、習得の初期段階ではかなり苦痛になる場合もある。だが、タンザニアの全民族のうち、スワヒリ語と同じバンツー語族に属する言語を話す民族が多数を占めており、しかも、できる限りスワヒリ語に接する時間を増やそうという教育方針から、近年では、その習得状況は大変目覚ましいものとなっている。

それに対して、最近疑問符がつけられているのが英語教育である。スワヒリ語が「国家語」そして「公用語」の地位を確実なものにしてきたのに比べ、英語の地位は「第二言語」

という独立直後のプレスティージから、単なる「外国語」としての価値しか持たないものとみなされるようになってきた。このことについての詳しい記述は後に譲るが（第三章・第１節）、小学校教育の中でも英語のこの価値の低下は顕著であり、それはＳＳ以上の教育機関での教育状況に、大きな悪影響を及ぼしている。下の表を見てみよう。[5]

《表二－２》

教科書名	学校での使用割合	児童数／教科書一冊
English for Tanzanian Schools(文部省編)	71％	８．５人
Communicative English for Tanzania(文部省編)	６％	教師用のみ
Primary English for Tanzania(文部省編)	11％	教師用のみ
New Oxford English Course(F.G.French編)	６％	教師用のみ
Modern English (Neil Osman編)	６％	教師用のみ

この表は、タンザニアの小学校での英語の教科書の使用状況を示したものであるが、「教科書が不足している」という言葉では、もはや片付けられないほどの事態になっている、というのが現状である。また、文法書や参考書といったものの不足も深刻であり、子供達の英語に対する興味も、特に地方の学校では薄れてきている。更に、英語の教師の不足の問題も大きく、これらのことを総合すると、これまでのスワヒリ語と英語の立場が、遂に逆転してしまったように思われる。

> アフリカ人の児童に対して、その母語の代わりにアフリカの言語を（教授用言語として）使用することが良いのは、使用する言語が彼らの母語に近接したものだからである。表現されることやイメージされることというのは、ヨーロッパ的ではなく、むしろアフリカ的なのである。児童はその生まれた土地だけにしがみついているのではなく、より広い環境の中で育っていく。その（代わりに与えられた）言語は、ヨーロッパの言語の場合とは違って、授業や本から学び取るだけではなく、他の（言葉をしゃべる）アフリカ人と接するうちに身についていくのである。[6]

この言葉が示す通り、明らかに、教授用言語を旧宗主国語からアフリカ固有の言語に切り替えていくことが、アフリカの教育現場にとって効果的だと考えられるのである。

ところが、小学校では、一教科としての英語を除いて、他の全ての教科がスワヒリ語で教えられているのに対し、ＳＳになるとその地位は逆転しているのが現状である。スワヒリ語が教授用言語とされているのは、わずかにスワヒリ語と政治教育のみとなる。しかし、この体制に対しては、1969年以来、何度となく異議が唱えられてきた。ＳＳ及びそれ以上の教育機関での教授用言語を、英語からスワヒリ語に転換させるためのプロジェクトは、1969年、1970年、1974年、1979年、1982年と、５回にわたって計画されてきた。[7]

> 小学校教育では、スワヒリ語が教授用言語であるのに、ＳＳになると英語を教授用言語とする体制をとっている。このことが教育問題を未解決にしているのであり、更に危険な状態も引き起こし続けているのである。（ＳＳにおいて）スワヒリ語を教授用言語とするクラスと、英語を教授用言語とするクラスの、両方を設けるようにすれば良い。（そうすれば）国内における諸問題と、ＳＳ教育とが、なんら関係を持たなくなるであろう。英語を教授用言語とするＳＳ教育を続行することは、決して良い結果をもたらさないであろう。[8]

このような意見をはじめとして、ＳＳでの教授用言語を、英語からスワヒリ語に転換させようという動きが強まった（現在もその動きは続いている）にもかかわらず、いくつかの要因があるために、いまだに実行されていない。第一の要因は、政府自身の消極的な態度である。いわゆる「植民地遺制」というものが根強く残っており、為政者たちが英語の恩恵に浴したいという願いを持っていることが問題なのである。また、以前から言われ続けていることだが、スワヒリ語には、ＳＳで教えられる全教科に十分対応できるような、学術専門用語が揃っていないという意見が、まだ大半を占めているというのも要因の一つである。これに付随して、教科書不足が挙げられる。と言うのも、需要がないためにＳＳ用の教科書を作成することもなく、従っていつまでも輸入されるわずかな英語の教科書に頼らねばならなくなっている。だが、学術専門用語の問題に関しては、国語審議会その他で様々な研究が進んでおり、もう少し前向きに考えるべき点である（この問題については、第三章・第４節参照）。そして、二番目の要因と関連することだが、スワヒリ語が国際的な言語ではないということが、大きな問題となっている。スワヒリ語をＳＳ以上の高等教育機関での教授用言語にするということが、とりもなおさず、科学的、あるいは技術的分野での、世界からの決定的な遅れを意味するというのが、一般的な意見として存在する。ＵＫＵＴＡの会員に対して、初代大統領のジュリアス・ニエレレが述べたことの中にも、

英語をそのまま教授用言語にしておくべきだという彼の考えが窺える。「ニエレレは、タンザニア人が英語とスワヒリ語の両方を習得しなければならないと強調した。更に、英語は、もしも単に一教科としてしか教えられなくなると、消えてしまう恐れがあるので、ＳＳと大学での教授用言語のままであると付け加えた」[9]のである。ＴＡＮＵでの活動などを通して、あれほどスワヒリ語の地位向上に積極的だったニエレレですら、英語の威信にすがりたいという気持ちを捨て切れないでいるのである。

しかし、先ほど述べたように、小学校教育では既に英語からスワヒリ語への転換が、ほぼ完璧な形で行なわれており、しかも英語に対する興味が、生徒の側も、教師の側も、どんどん薄れているのが現状である。テキスト不足や、教師の質の低下により、ＳＳに進んでもその状況は良くならないどころか、悪くなる一方である。特に教師の質の問題はかなり深刻であり、英語に余り堪能ではない教師に習った児童がＳＳに進み、またそこで同じような教師に習って、高等教育機関に進むか、あるいは小学校の教師になるということもあるから、そこで悪循環が生まれるのである。

英語がタンザニアのＳＳの教授用言語として、既にその力を失っていることを示す調査結果として、次のようなものがある。

> 調査対象のＳＳの生徒全体を見ても、50％くらいの生徒が、ほとんど、あるいは全く、授業内容のわかっていない科目がある。４年生のわずかに10％ほどしか、英語を教授用言語としても十分理解できる能力を持っていない。(p.14)
>
> ５年生でＡレベル（に近いが、一人でスラスラと読み進めることはまだ難しい）に到達している生徒の割合は、わずかに17％である。(p.14)
>
> （大学の）学生の英語のレベルは、到底大学の授業の教授用言語である英語を理解できるものではない。(p.15)
>
> 調査対象の（大学生の）うち、自分の研究に必要とされるごく簡単な学術専門書を楽に読めるレベルにあるのは、20％にも満たない。(p.43)
>
> 少なくともＳＳ１年生では、75％以上が教授用言語をスワヒリ語にしているという数字が出せる。[10]

以上は、クリッパーとドッドが1984年に、タンザニアの全ての教育機関から無作為に選んだ2410人に対して行なった調査結果である。テストの内容、施行方法の詳細が不明であることから、余り断定的な意見を述べるのは危険とも思えるが、ここで言えることは、もは

やＳＳのレベルにおいても、英語の勢力が衰え、スワヒリ語がある程度の力を持ってきているということである。

教育は、国家の運営と発展の土台となるものである。従って、そこで使用する教授用言語が、重大な役割を果たすことは明白である。ファソルドは、その教授用言語の選択の際に考慮すべき点として、次の３点を挙げている。

１．生徒がその言語を使って学習するのに十分な知識を持っているか。

２．その選択した言語が、国家的目的に合致したものであるか。

３．その言語で書かれた資料（テキストなど）、及びその言語に堪能で、期待されるレベルの授業ができる教師の数が揃っているか。[11]

昨今のタンザニアの言語状況を鑑みれば、ファソルドの指摘した３点をこれから満たすであろう言語は、もはやスワヒリ語であるとしか言えなくなっているのではあるまいか。現に、教育分野における英語の力の衰退をくいとどめ、教授用言語としての権威を取り戻させようとして試みられた、イギリス政府の援助によるプロジェクトである、英語サポート・プロジェクト（English Language Support Project）にしても、期待されたほどの成果は上がっていない。また、ダルエスサラーム大学で行なわれている、英語に堪能ではない学生に対しての救済措置である、コミュニケーション技能対策授業(Communication Skills Unit)にしても、その体制や方法について、整備が不十分であるなどの問題点が指摘されており、状況はかなり厳しい。[12]英語ではたちいかなくなったからスワヒリ語に転換する、というのではなく、スワヒリ語の力が英語を凌いだからこそ、全ての教育機関での教授用言語の転換を行なう必要がある、という状況にまで進んでいると言える。残された問題は、できる限り早く学術専門用語を整備することと、テキストや参考書を揃えること、そして何よりもスワヒリ語自身に付随する「世界に通用できない言語」といったイメージを、政府、教育機関、研究所、そして国民全体が、払拭するべく努力することである。ＳＳ以上での教授用言語の転換は、これからのタンザニアの言語計画の中で、最も重要な点なのである。

（第２節）文学用語としてのスワヒリ語

スワヒリ語ではまともな文学作品は書けないのではないか、あるいは、例えばシェーク

スピアやトルストイといった作家の手になる作品とは、比べものにならないくらい幼稚なものであろうといった意見が、何の疑いもなく言われることがあるかも知れない。[1] 多くの第三世界の言語がそうであるように、スワヒリ語も、文学（特にここでは近代文学）を書くには語彙の少ない、表現も乏しい、いわゆる近代文明国家の言語からは遥かに遅れた言語である、というレッテルを貼られてきた。しかし、「アフリカの言語が文化表現の道具として未熟だなどという考えは、言語学徒から見れば馬鹿げている。物質文化や精神文化を含めて、自らの生活の一切を表現できない言語などは一つも存在しない。…アフリカの言語で書かれる文学は低級で、人間の内面を奥深く追求できていないのではないかとの疑問に対しては、慣習、行動様式、抱負、人生観、歴史、政治状況などの相違によって、評価の物尺は民族・社会ごとに異なるものだと主張したい。このことは、文学の普遍性の概念についても言える」[2] のである。従って、「スワヒリ語の近代文学が相対的に見て劣っている」という考え方は、極端に言えば、その言語を話す国が産業において発展途上にあるから、文化も同様であるというような、非常に否定的な考え方である。今や、ノーベル文学賞の候補にも、アフリカ人作家が名を連ねるようになってきており、そのことから考えても、文学におけるスワヒリ語の位置というものを明らかにしておく必要がある。

スワヒリ語の近代文学の祖と言えば、やはりシャアバン・ビン・ロバートであろう。植民地官吏であり、東アフリカ文学局（East African Literature Bureau, 1948年設立）、タンガニーカ文学局（Tanganyika Literature Bureau）、領土間言語（スワヒリ語）委員会（Inter-Territorial Language(Swahili) Committee)などに関わったことから、英語にも当然堪能であったのだが、徹底して彼はスワヒリ語で書いている。彼の有名な言葉、'Titi la mama litamu lingawa la mbwa, lingine halishi tamu.(母の乳はうまい。例えそれが犬の乳であるとしても、他の物ではうまくないのだ。)'は、「犬」というスワヒリの世界では蔑まれている動物をわざと引き合いに出し、例えスワヒリ語が劣った言語だと蔑まれていても、自分はその母なる言語で書くのだ、という決意を表している。作品の特徴としては、非常に道徳的で、且つ、ユートピア的である、というのが挙げられる。また、タンザニアのウジャマー精神につながる作品も書いており、アルーシャ宣言の行なわれた頃には、彼の描いた理想社会、ひいては彼の作品が再評価された。[3] 彼の描く人物が作品中で成長しないことや、内容が勧善懲悪的なものに偏りすぎるということから、夢想的であるという批判もあろうが、スワヒリ語に近代文学用語としての新しい側面をもたらした

ことは、彼の偉大な功績である。

シャアバンが一貫してスワヒリ語の作品を書いたことは、後に続く作家達にも大きな影響を与えている。60年代の後半には、W.H.Whiteleyがその著書の中で、シャアバンというスワヒリ文学の傑出した存在を認めた上で、それに続く若手がいないということを半ば悲観的に述べていたが、現在では、何人かのスワヒリ近代文学を担う優れた作家が存在している。モハメド・サイド・アブドゥラー(1918－1991)、モハメド・スレイマン(1945－)、サイド・アフメド・モハメド(1947－)、シャフィ・アダム・シャフィ(1940－)、ペニナ・ムハンド(1948－)、エブラヒム・フセイン(1943－)などの作品は、恋愛小説、推理小説、歴史小説、政治小説など、多分野に及んでおり、シャアバンがユートピア的作品を書いていた頃に比べると、ずいぶん近代文学としての幅が広がってきているのである。特筆されるべき作品ばかりではないが、社会の内面をえぐるような作品においては、その描写に技巧を凝らしたものも多く、決して他の言語の作品に比べて見劣りすることはないと言えよう。1967年のタンザニア・ブック・ウィークの運動の一環として、ダルエスサラームの成人教育センターで行なわれたディスカッションにおいて、S.S.Mushi が次のようなことを述べている。

> 今、我々がペンを取り、（スワヒリ語で）書くべき時が来ていることを、老若男女を問わず全ての（タンザニアの）国民が理解して欲しい。その試みは、必ずや「アルーシャ宣言」の主旨に沿ったものとなるはずである。我々が経済的にも政治的にも自立しなくてはならないように、ものを書くという分野においても、我々は自立しなくてはいけないからである。[4]

この言葉が示す通り、タンザニアではスワヒリ語で文学作品を書くということが大変奨励され、現に、初代大統領のニエレレは、自らシェークスピアの作品（『ジュリアス・シーザー』）をスワヒリ語に翻訳してみせるなどして、スワヒリ語が文学という分野にも十分対応できることを示した。これら一連の試みは、政治的意図があったにせよ、現在のスワヒリ文学の高揚には大きく貢献したはずである。

しかし、スワヒリ文学が、一体どの程度国際的な理解を得られるかといったことになると、必ずしも楽観的な見方はできない。ペニナ・ムハンドは、インタビューの中の「スワヒリ語で書くことからもたらされる問題」についての質問には、まとめると次のように答えている。「スワヒリ語で書けば(世界的な)読者が減ることはわかっているから、国際的

に理解される言語で書いた方がいいとは思うが、書き始める時には、誰よりもまずタンザニアの人々に向けて書くのだということを念頭に置いている。それに一番使い勝手のいい言語で書くとなれば、やはり英語ではなくスワヒリ語ということに自然となってしまう。しかし、読者が限られること、出版事情が悪いためになかなか作品が世に出ないこと、アフリカ人が総じて「オーラル」の文化を持っているために、「読む」という習慣がまだまだ確立されていないこと、そして何よりも、本などを買うよりも、まず生きていくために最低限必要なものを買わなければならないから、一般大衆は本を余り買える状態ではないこと、これらの要因が重なって、スワヒリ文学は依然として文学としての最高の状態を享受できないでいる。従って、それを書く作家にとっても、これからもまだまだ苦労は続くであろう。」[5] スワヒリ語作家が世界に向けて伝えたい問題は山積しているはずであり、作家の使命はいかにしてそれらの問題を強く訴えるか、ということであるのに、現在のところはペニナ・ムハンドが指摘しているような問題があるために、期待されるレベルにまで到達していないのである。

タンザニアは、国家的事業としてスワヒリ語での著作活動を推進している。それはとりもなおさず「スワヒリ語国語化政策」の一翼を担うものである。それによって、母語での執筆活動が奨励されず、他の民族諸言語の果たす役割は、相変わらず「話し言葉」としての機能だけである。ペニナ・ムハンドもそうであるが、タンザニアの伝統的な口承文芸や、舞踊などの文化を、自らの文学作品中で、表現の一手段として織り混ぜている作家も中にはいる。しかし、そういった試みはまだまだ数少ないものであり、いわゆる大衆小説といった分野に属する作品では、「スワヒリ語で書く」ことがまず第一条件であって、タンザニアの様々な民族の文化や伝統について言及したり、そのことを題材にして書くことができる作家の数は、今のところ限られていると思われる。だが、驚くべき速さではないにしても、スワヒリ文学は着実に地歩固めをしつつある。これから更にスワヒリ語を強化していく政策を取るのであれば、なおさら文学の果たす役割も大きくなる。劣悪な出版事情などの拭い切れない問題もあろうが、文学という、民衆に対して最もストレートに内なる課題を訴えかける手段を、決してないがしろにしてはならないのである。

> 富と貧困の両極に引き裂かれた現代世界で、アフリカの一秒一瞬が苦難に満ちていることを忘れないでほしい。貧困、疾病、蛮行、政治的暴力、腐敗、絶望が常に私の心を痛めるのである。心の内側に渦巻く、このやり場のない怒りにも似た感情を言葉に

表現することが、作家としての私の使命だと考えている。そして、この複雑な感情は、私の母語であり同胞の母語でもあるスワヒリ語以外で的確に表現できるとは思わない。…私を育ててくれた母なる言葉＝スワヒリ語の発展のために、作家として最善を尽くしたいと願っているのである。[5]

「個」としての作家が、このような決意を表明するまでになった今、政府は「国家語」としてのスワヒリ語に新たな力を与えるためにも、通り一遍の奨励事業ではなく、もっと現実に即した対応をしなければならないのではないだろうか。スワヒリ語はタンザニアの全国民のための言語として、全国民の文化を担うという役割を果たさねばならないはずである。そのためには、スワヒリ語の陰に隠れている他の民族諸言語の文化や伝統を、できる限り後世に伝えていくように、スワヒリ語を媒介言語として書き著わすことも必要になってくると思われる。また、国際的な理解を促すためにも、特にアフリカの抱える諸問題をクローズアップしているような作品は、英語のような世界的言語に翻訳することも重要であろう。スワヒリ現代文学そのものの発展、向上、その他の民族文化の継承の手段としての責務、これらの文学に関わる諸問題への早急な対応が、教授用言語の問題同様、政府に迫られている。

【第三章】「国家語」としての力

（第１節）英語－スワヒリ語論争

「コードスイッチ」、あるいは「言語スイッチ」という言語行動は、タンザニアのような多言語国家では当然起こり得る。実際、英語とスワヒリ語、スワヒリ語と母語、またある場合には、英語、スワヒリ語、母語のコードスイッチが行なわれることもある。このような三言語併用の状態をさして、M.H.Abdulaziz Mkilifi は「三重言語使用(Triglossia)」[1]と呼び、W.H.Whiteleyは「三焦点言語使用(Tri-focal nature of language use)」[2]と呼んだ。Abdulaziz の言う「三重言語使用」を簡単にまとめてみると、以下のようになる。

（a）基本的役割が、地域内での口頭コミュニケーションの媒介である地域語、または土着言語。

（b）教育システム、マスメディア、行政機関などの広い分野で使用されている、地域標準リンガフランカ。但し、近代都市技術文化の全分野を網羅するまでには至らない。

（c）世界言語。[3]

植民地時代、及び独立直後の言語状況では、（c）すなわち英語の力が強く、英語の理解度によって、受けられる恩恵も違っていた。

ところが、既に第二章でも述べてきたように、近年の言語状況は、大きく変わりつつある。今までの英語の勢力範囲を、スワヒリ語が侵食しつつある、と言うのである。

英語は、バスの運転手と話したり、銀行で預金残高を尋ねたり、郵便局で切手を買い求めたり、駅で列車の席を予約したり、保健所で医療助手と話したり、「カヤ」[4]ショップで日用品を買ったり、あるいは派出所で警察官に供述したりする時に使用する言語ではない。また、国会で予算編成について議論する時に使用される言語でもない。タンザニアでは、英語は教室内だけの言語なのだ。一旦教室を出ると、スワヒリ語が支配的である環境におかれることになる。この状況の中で、必要とされる十分なレベルにまで英語をマスターすることは、至難の技である。[5]

この言葉が示すように、多くの知識人達が、既に英語が第二言語の立場から単なる外国語の立場へと降格されていることを指摘している。それは、社会言語学的に見た、ここ20年間の、タンザニアにおける英語とスワヒリ語の地位の逆転に裏打ちされた、もっともな意見と言えよう。しかし一方で、いまだに高等教育機関の教授用言語が、英語からスワヒリ語に転換できないことを強調し、英語の力を再認識すべきであるという意見を持つ人々も存在する。この相反する二つの立場に立つ人々の意見を、以下の、“Africa Events” February 1988に掲載された、S.Yahya-Othmanの‘When International Languages Clash (国際的言語同士が衝突する時)’という論文が発端となって展開された、「英語－スワヒリ語論争」の中で見ていくこととする。

Othmanは、アフリカにおける二言語併用（三言語併用）の状況を、避けがたい当然のものとしながらも、タンザニアにおいて、これからも英語とスワヒリ語に対するあいまいな政策がとられ続けることは、国家の発展にとっても、国民の生活水準の向上にとっても、良い影響は及ぼさないだろうということを指摘している。それは、とりもなおさず、「スムーズな言語計画」の好例であると言われる自国の政策に、大きな疑問を投げかけている

に他ならない。[6] 同じような意見として、ダルエスサラーム大学スワヒリ語学科の、F.E.M.K.Senkoro の'The Last of the Empire(帝国の最後)' という論文がある。この中では、スワヒリ語が直面している言語状況、つまり、「国家語」であるにも関わらず、高等教育機関での教授用言語ではないことが、タンザニアのスムーズな教育の発展を妨げている、と述べられている。多民族を抱えているとしても、スワヒリ語は十分それら全てをまとめあげる力を持ち始めているとし、英語の地位を再度向上させてしまうことは、帝国主義の復権にも繋がりかねないと、語気を強めている。[7] また、タンザニア出版社のWalter Bgoyaは、'About Turn!(今こそ転機だ!)' という論文中で、初代大統領ジュリアス・ニエレレの行なった、高等教育機関での教授用言語を英語としなければならないことについての演説をまとめた上で、それを批判する形で、国内のスワヒリ語転換論と英語維持論に対する、政府の明確な対応を迫っている。加えて、イギリス政府の援助による「英語サポート・プロジェクト」(English Language Support Project) や、イギリス資本の出版社(例えばOxford University Press) による教科書の出版に関することにも言及し、再びイギリスの資本がタンザニアの出版業界に入り込むことは、自国の出版社の発展や、それ以上に文部省等の教育関係の省庁の取り組みに悪影響を及ぼすことになる、と批判している。[8] ここまでは、論争の中でもスワヒリ語擁護側の意見であるが、これらとは一線を画する意見も掲載されている。Ben Kaswaga は、'English language･･･an Enemy?(英語は果たして敵なのか?)' という論文の中で、前述の三論文とは違った意見を展開している。まず、Senkoro が述べていた、小学校卒業時の資格認定試験の際の、スワヒリ語と政治教育（両者とも一貫してスワヒリ語が教授用言語）以外の教科での失敗が、英語が教授用言語であることに起因している、ということに対して、全く別の見方をしており、むしろＳＳの１年生の英語の能力の低レベル化は、小学校教育の教授用言語がスワヒリ語であることに起因しており、せっかく多くの知識を与えようと思っても、すぐにはそれができないことの方がもどかしいと述べている。Kaswaga は決して言語帝国主義的な意見を展開しているのではない。そのことは、スワヒリ語をタンザニアの国家語として誇りに思う、英語ではタンザニアの国家的アイデンティティを養い得ない、スワヒリ語こそがその担い手である、という意見からも明白である。その主張の中心は、英語への別の次元からの対処の重要性なのである。英語を使用し、学ぶということは、決してタンザニアの国家的アイデンティティを「英語で」養うためではなく、単純に可能な限り高いレベルにまで教育水準を引き上げるためであり、また、イギ

リス政府の英語教育に対しての援助にしても、決して「かつての栄光」を再び享受しようという欲望からではない、と主張し、そのことが直接的にスワヒリ語の「国家語」としての地位をおびやかすことにはならないとしている。「英語がタンザニアの発展とスワヒリ語の言語的優位性にとっての敵だ」などという、誤った、狭い考え方こそ除去しなければならないのであり、スワヒリ語と英語がうまくかみ合っていけば、必ず教育水準は上がるはずであると締めくくっている。[9]

タンザニアでスワヒリ語が「国家語」に定められてから既に30年、「公用語」に定められてから四半世紀が過ぎようとしている。この間、様々な意見が出されては、政府のあいまいな対応のために、一般大衆にまで浸透する前に掻き消されたり、あるいは議論にのぼったとしても取るに足らないものとされてしまったりと、知識人達の努力が政策に反映されることが滅多になかった。今回取り上げた「英語－スワヒリ語論争」にしても、ごく一部分にしか過ぎず、しかも、これらの意見が一般大衆にまで届いた場合、彼らがどのように反応するかを想像するのは、容易なことではない。いずれにせよ、英語とスワヒリ語の地位の逆転が認められながらも、それぞれの役割を明確に定義しないままぼかし続けていることは、やはり国家としての更なる発展を目指す場合に、大きな障害となるであろう。政府は、このあいまいな政策に対して妥協することなく、研究や検討の機会を増やして、論争解決の糸口を見つけ出すことを、早急に考えねばならない時期に来ているのである。

（第２節）民族諸言語との摩擦

英語との確執がクローズアップされる一方で、スワヒリ語とその他の民族諸言語との関係は、余り大きく取り上げられることがない。それはおそらく、「国家語」としてのスワヒリ語と、既に言語としての機能が、単なる日常のコミュニケーションに使用される生活語として限定されてしまった他の民族諸言語との間に、一線を画すためなのであろう。実際問題として、昨今のタンザニアの言語状況を鑑みた場合、スワヒリ語以外の民族諸言語の中には、人口の減少が見られるものがいくつかある。サハラ以南のアフリカ諸国の中にはその言語総数が100や200に達する国もあり、常に「国家語」や「公用語」の陰に隠れて、その人口が確実に減少している言語が少なくないと思われる。

タンザニアにおいては、1970年代の小学校教育では、１年次の導入部分で、各地域の中

心的役割を果たす土着言語が、説明不足を補うために、スワヒリ語と並んで教授用言語として使用されることもあった。しかし、最近のスワヒリ語の浸透の早さと広さに反比例して、土着言語の使用はかなり限られてきているだろう。また、両親の母語がスワヒリ語以外の民族諸言語であったとしても、都市部に出てきて生活していれば、家庭で両親が意識的に自分達の母語を使わない限り、その子供の生活言語は、スワヒリ語か英語、あるいはその両方になってしまうのが現状である。従って、母語としての民族諸言語のおかれている状態は、決して安穏としたものではなく、常に「国家語」としてのスワヒリ語と、「エリートのための言語」である英語の脅威にさらされているのである。

タンザニアを近代国家として統一し、発展させるためには、どうしても「国家語」としてのスワヒリ語の役割は欠かせないものである。ここ30年来の言語計画は、その意味では一応の成功を収めていると言える。しかし、そのことが他の民族諸言語の言語としての機能限定に拍車をかけているということも、忘れてはならない事実なのである。「英語－スワヒリ語論争」に対する政府のあいまいな政策が批判されるのに対し、スワヒリ語と他の民族諸言語との関係については、政府の対応は適切であった[1]と言われている。Abdulazizが、「タンザニアの（スワヒリ語以外の）土着言語は、語彙、歌謡、文化、舞踊といった分野で、現在あるいは未来を通じて、スワヒリ語を豊かにしていく源になるはずであると、肯定的に認識されているにもかかわらず、学校教育やマス・メディアのような分野では、明確な立場を与えられていない。しかし、それらの土着言語は、それを母語とする人々によって話されているのであり、大学のレベルにおいても、その調査、研究に力を入れるよう努めている。各民族の口承伝統、歌謡、舞踊について、全てがタンザニアの遺産であるという具合に、学校で（多くの場合スワヒリ語で）教えられている。更に、新しい（スワヒリ語の）語彙の源は、何よりもまず、スワヒリ語と他のバンツー系言語であるべきだ、という明瞭な政策も打ち出されている。」[2]と述べているように、「スワヒリ語の、主に語彙面でのサポート役」という立場を他の民族諸言語に与えたことから、「適切だ」と判断されているのであろう。確かに、独立後の政策の一つとして、各民族固有の文化及び伝統を守り、後世に正しく伝えていくというものがあった。文化省が中心となって進めていった[3]ものである。だが、本来民族固有の文化や伝統というものは、それらを担ってきた言語で伝えられるべきなのであって、他の言語を介してしまうと、必ずどこかに歪が生じるのである。「一つの民族がその民族本来の民族言語を喪失するときは、その

民族は厳密な意味においては滅亡したのであり、全然別個な民族に変化したことを意味する。少なくとも自分の民族語で思考し、生活してはじめてその民族はその固有性を維持し発展する。母語を喪失した民族は既に、固有の民族のものの考え方を失う。そして、決して自己限定的になりえず、他民族に従属するか、あるいはまた独立を保つことができなくなる」[4]と言えるのである。現在、特に都市部においては、既にいわゆる「母語」の定義が困難になりつつある世代が増えているということから考えると、民族文化の在り方の一つの大きな指標が、揺らぎ始めているということが言えるのではないだろうか。

民族諸言語と「国家語」の在り方への、各国の対応、また、知識人達の考え方も様々である。例えばケニアでは、1968年頃には、小学校教育の最初の3年間は、各地域の土着言語が教授用言語として使用されていた。しかし、その目的は、児童の母語に対する能力を高めるというものではなく、単に読み書きに慣れさせるというものであった。しかも、テキスト不足や、教師側の対応のまずさから、決して各土着言語に良い影響を及ぼすものではなかったのである。その後、スワヒリ語が「国家語」に制定されてからは、他の民族諸言語に対する確固とした方針は打ち出されておらず、現在においてもあいまいな状態が続いている。[5]また、南アでは、アパルトヘイト制度の一環として有名な、バンツー教育法(1953年制定)が挙げられる。これは各民族毎にその民族語で教育を行なうというものであるが、その目的は、アフリカ人には英語やアフリカーンス語を教えずにアフリカ人同士を分断させ、孤立させ、社会的地位の向上を不可能にすることにあった。現在、次々とアパルトヘイト制度が撤廃されていきつつあり、言語政策にしても、従来は英語とアフリカーンス語が公用語であるが、ソト語やズールー語、コサ語といった、アフリカ固有の民族諸言語の中から、新たに公用語とするべき言語を選択することが検討されている。しかし、それらの比較的大きな言語でも、正書法に統一性はまだなく、標準語制定までには時間がかかるであろうし、公用語にはなり得ない小言語との関係の調整といった、民族諸言語の在り方についての議論は、やっと行なわれ始めたところである。こういった国家レベルの対応が、一般的にあいまいであるか、遅れているのに対し、より明確に自らの進むべき道を示しているのが、アフリカ人作家として著名なグギ・ワ・ジオンゴとチヌア・アチェベである。

二人が著名なのは、アフリカ人作家として抜きん出ていることからだけではなく、その対照的な作家活動、言語的実践からでもある。アチェベが、自らの著作活動を英語で行な

うのは、アフリカ人作家というものが、アフリカ諸国の植民地化過程の副産物であり、英語はその時に与えられた「書くための」手段であるからだとしていること、それに対して、グギが決然と「帝国主義国」の言語で書くことを捨て去ったと表明していることは、余りにも有名である。アチェベは「アフリカ人作家と英語」という論文を、次のように締めくくっている。

> アフリカにおける植民地支配は多くの混乱を引き起こした。しかし、それは従来の矮小で散在的な政治単位のかわりに巨大な政治単位を生み出しもしたのである…。アフリカ人作家は、アフリカの新しい国民国家をつくりあげたのと同じプロセスの産物なのである…。世界語で書くことにはたしかに大きな利点がある…。私は英語がアフリカの体験の重みを背負うことは可能だと思っている。しかも、それは祖先の土地との接触を十分に保ちながらも、新しいアフリカの環境に見合うように変更された新しい英語となるにちがいない。[6]

アチェベの国、ナイジェリアも、もちろん多民族、多言語国家であり、一つの国家として機能していく場合、どうしても英語という言語に頼らざるを得ないのが現状である。しかし、アフリカ人作家がアフリカの抱えている問題を近代文明国家の言語で書く場合、どうしても「英語やフランス語で書かれた作品というのは、常に肝心のリアリティから疎外されている感じ」[7]になってしまうことも、否めない事実である。アチェベは、これらのことを理解した上で、「英語がアフリカの体験の重みを背負うことは可能だ」[8]という考え方で、英語での著作活動を続けたのであった。おそらく、英語やフランス語で書くアフリカ人作家のほとんどが、アチェベの考え方に共通するものを持っているだろう。これに対し、グギが英語を完全に捨て去り、母語であるギクユ語で書くようになったのは、英語やフランス語で書いている限りつきまとう、「支配する側の言語」によるエリートのための文学、というイメージを振り払い、母なる言葉を話す者のための文学を目指し、そうすることで精神的な帝国主義支配から民衆を解放するという目的があると思われる。

> 私はケニアの一言語であり、したがって、アフリカの一言語であるギクユ語で書くことがケニア人とアフリカ人の反帝国主義の闘いの核心部分になると信じている。学校や大学で、ケニアの諸言語は後進性、低発展、屈辱、罰則などといった否定的特質と結びついてきた。そのような学校制度で学んだわれわれは、日常的な屈辱と罰則をもたらす言語を話す人びと、その文化、その諸価値を憎悪して卒業するようにしむけら

れた。私はケニアの児童が、自らの共同体と歴史が発展させてきたコミュニケイションの道具を軽蔑するような、帝国主義者によって押しつけられた伝統の中で育ってほしくないと考える。私は彼らが植民地的疎外を超克してほしいと考える。[9]

グギの決断は、「自己と自己の言語と自己の環境との調和を出発点」[10]とすれば、「自己の言語や自我や自己の環境に何のコンプレックスを抱くことなく、他民族の文学と文化の中のはっきりと人間的、民主的、革命的な要素を享受することさえできる」[11]と考えてなされたものである。母語という自らの共同体の歴史と文化を伝達する道具を、植民地主義(新植民地主義)からの脱却の糸口としようというグギの試みは、十分評価できるものである。

タンザニアの場合、第二章・第2節で述べたように、スワヒリ語による著作活動は奨励されているが、他の民族諸言語で書くことは、国家政策に沿うことではなくなってしまう。ペニナ・ムハンドは、スワヒリ語で書くことが自分にとっては自然なことだと言いつつも、本当は母語で書きたいということももらしている。近代国家として歩み始めたばかりのタンザニアで、「国家語」としてのスワヒリ語を前面に押し出さねばならないことは事実である。しかし、スワヒリ語がかつての英語のように、他の民族諸言語を排斥するという形になってはならない。今やフランスにおいても、かつて「罰札制度」により母語を排斥したことを悔い改め、各地で母語による教育の見直しや文化活動が行なわれている。[12]フランスにおける、「国家語」であるフランス語以外の「フランス語諸方言」を擁護する政策への転換、及び、旧ソ連の各共和国での各民族語による教育などは、そのまま踏襲できないにしても、これからのタンザニアにおいても、何か参考にすべきことがあるように思われる。各民族の歴史と文化の火を絶やさないためにも、スワヒリ語がそれらの歴史や文化を後世に伝える効果的な手段となるべく、これからの国家的文化活動の在り方を、十分考慮していかねばならないだろう。

(第3節) 浸透度 ── 三重言語生活の中でのスワヒリ語

教授用言語としてのスワヒリ語、あるいは文学用語としてのスワヒリ語は着実に浸透しつつあるが、それでは国内での使用状況は、一体どのようになっているのであろうか。ここでは、今や全国でほぼ完全に理解されるようになっているというスワヒリ語の浸透度を

明らかにするために、言語生活に着目してみたい。

スワヒリ語を母語とするのは、タンザニアの人口の10％ほどの人々であるから、当然残りの90％に及ぶ人々は、スワヒリ語とは別の母語を持ち、普通はその母語とスワヒリ語の二言語併用の生活を送っている。しかも、今のところ高等教育を受ける限り、必ず英語もある程度理解できなければならないので、本章の第１節で述べたコードスイッチが起こるのである。ただし、「何らかの英語の知識を持っているのは国民の15％にしか過ぎず」[1]、三言語併用（あるいは、他の民族語を知っている人であれば、四言語(以上)併用）の生活を送っているのは、わずかな人々に限られるのである。また、スワヒリ語の使用頻度と二言語併用のパターンとその頻度も、画一的なものではないということがわかっている。1976年にO'Barrは、自ら行なったパレ地区（タンザニア北東部）での調査結果に基づいて、スワヒリ語の知識傾向が三つに分かれることを指摘した。

１．男性は概してスワヒリ語についてのある程度の知識を有する傾向にある。

２．若年層は壮年層に比べて、スワヒリ語をより柔軟に使いこなしている。

３．より高い教育を受けた人の方が、より流暢にスワヒリ語を話すようである。[2]

これについては、「都市部－地方周縁部という二分法を加味することができるかもしれない。」[3]実際、「スワヒリ語は地方周縁部においてよりも都市部においての方がより使用される傾向にあり」[4]、「都市部に生まれた子供たちの多くは、例え両親の母語がスワヒリ語ではなくても、自分たちの第一言語としてスワヒリ語を話す」[5]ようにさえなっている。[6]言語生活のパターンとしては、次のような分類が最も一般的であろう。「土着言語(スワヒリ語以外の民族諸言語)は親しい間柄にある者、例えば家族、親友などと形式ばらない会話をする時に使用される。お互いの土着言語（母語）が同一でない場合、スワヒリ語が媒介言語となる。スワヒリ語はまた、国家的公生活、つまり、国会、政治集会、郵便局、交通機関、銀行、学校、教会などで使用される言語でもある。英語は、高等教育、高等法院、控訴院、外交、対外貿易、及び外国人、または外国との商取引の際に使用される言語である。」[7]この状態は、Abdulaziz の言う「三重言語使用」の特徴に合致したものである。しかし、都市部でのスワヒリ語の浸透が、英語の勢力範囲を放逐するまでになってきたことは既に述べた通りであり、その使用パターンは次第に変わりつつあることが認められている。[8]

次に、小学校児童の英語の使用状況を調査した結果を見てみよう。[9]

《表三－１》

英語を使用する機会	児童の回答割合(%)
(低学年)	
１．友達と会話する時	３２
２．先生と会話する時	０
３．両親、親戚と会話する時	８
４．英語の授業ノートを復習する時	１１
５．ラジオを聞く時	４
６．新聞を読む時	０
７．本を読む時	１４
(高学年)	
１．友達と会話する時	６６
２．先生と会話する時	８
３．両親、親戚と会話する時	１２
４．英語の授業ノートを復習する時	７８
５．ラジオを聞く時	８
６．新聞を読む時	８
７．本を読む時	１８

この結果の数字だけを素直に受け止めれば、小学校の高学年にもなれば、かなり多くの児童が英語で会話しているように思われる。しかし、「児童が英語を使用している」と言う時、それは実際には、スワヒリ語または彼らの母語を使用して会話している中で、英語の単語を数語、間にはさんで使用しているにすぎないのである。[10] つまり、英語を終始会話の中で使用するといったことは、滅多にないのである。[11]

次に、タンザニアの言語使用状況について調査した結果を見てみたい。この調査結果は、B.Misanaの個人原稿を、Rubagumya が、三重言語使用が顕著である主な領域について簡潔にまとめたものである。[12]

《表三－２》

領　　域	土着言語	スワヒリ語	英　語
１．日常会話			

－家庭内	ＶＶ	（ＶＶ）	
－近隣居住区	（ＶＶ）	ＶＶ	
－仕事場	（Ｖ）	ＶＶ	
２．文化面			
－礼拝場	（Ｖ）	ＶＶ	
－文学		ＶＶ	Ｖ
－映画		Ｖ	ＶＶ
３．商業面			
－大事業		ＶＶ	ＶＶ
－小事業	（Ｖ）	ＶＶ	
－旅行事業		Ｖ	ＶＶ
４．教育面			
－教授用言語：小学校	（Ｖ）	ＶＶ	
－教授用言語：ＳＳ		（Ｖ）	ＶＶ
－教授用言語：高等教育			ＶＶ
－教授用言語：成人教育		ＶＶ	
－本(教科書)、定期刊行物		ＶＶ	ＶＶ
５．政治面			
－国会		ＶＶ	
－公的政治集会		ＶＶ	
６．行政面			
－村単位	（Ｖ）	ＶＶ	
－地区／地域単位		ＶＶ	
－国全体		ＶＶ	（Ｖ）
７．司法面			
－初等裁判所	（Ｖ）	ＶＶ	
－地区裁判所	（Ｖ）	ＶＶ	（Ｖ）
－司法裁判所	（Ｖ）	（ＶＶ）	ＶＶ
－高等裁判所／控訴院	（Ｖ）	（ＶＶ）	ＶＶ

8．マス・メディア面			
ーラジオ		VV	V
ー新聞		VV	VV
9．国際関係面			
ー外交		(V)°	VV
ー貿易		(V)°	VV
ー文化交流		(V)°	VV
ー情報交換		(V)°	VV
ー科学、技術交流		(V)°	VV

（注：VVは通常使用されていることを、Vは時々使用されることを、( )はコンテキストにより左右されることを、また、9．における( )° 印は、近隣諸国との交流で時々使用されることを示す。）

更に、司法面だけについてより詳しく調査した結果が、以下のようになっている。（KavughaとBobbの1970年の調査による。）[13]

《表三－3》（数字は%）

使用言語＼裁判所	高等裁判所	司法裁判所	地区裁判所	初等裁判所
スワヒリ語	28	56	79	92
英　　語	60	43	15	0
土着言語	12	1	6	8

「おそらくこれらの数字からは、段階が上がるに連れて英語の使用が増える、という事実が導き出せる」[14]のだが、KavughaとBobbはこの結果について、「全体的に見れば、スワヒリ語使用は78%、英語使用は16%、土着言語使用は6%となる」[15]と記述している。また、詳しい分析の結果を次のようにまとめている。

1．英語は、法廷の全職員（判事、弁護士、書記）により、裁判時の93.5%にわたって使用されている。しかし、証人、被告、原告の使用は、6.5%にとどまる。

2．法廷にいる者は、タンザニア人かケニア人、またはタンザニア在住のアジア人であるから、裁判時の74.5%にわたって、全ての発言者がスワヒリ語を理解している。

3．言語スイッチ（すなわちコードスイッチ）は、いずれの裁判時にも見受けられ、

それは地位、出自、教育のレベルに関係なく、どの個人にも起こることである。

コードスイッチのほとんどが、英語とスワヒリ語との間で起こる。[16]

このような事実を踏まえてRubagumyaは、スワヒリ語が法廷における支配言語であること、土着言語の使用は、スワヒリ語が話せない遠隔地の人々にのみ限られること、高等裁判所では英語の使用が多いが、英語を話せない人々と会話する場合は、スワヒリ語を使用するか、英語とスワヒリ語のコードスイッチを行なうことになること、を指摘している。[17] 更に、「現在、タンザニアの司法業界の90％以上の人が、スワヒリ語を話すことができるだろう。このことは、上の調査結果（1970年の状況を反映する）が示唆しているレベル以上に、現在では、より一層スワヒリ語使用が法廷で増えていることを示す」[18]とまとめている。司法という、いわば非常に特殊な領域において見られるこのスワヒリ語の隆盛は、注目に値するものである。ここで示されている状況を、言語生活全体に投射してみた場合、小学校教育におけるスワヒリ語の支配力の向上で、遠隔地でもスワヒリ語を理解する人の数は増加する傾向にあると思われるし、スワヒリ語の教育が今後ますます拡大されれば、土着言語の使用は、特に公の場においては縮小されていくであろう。英語に関して言えば、この言語が世界的に果たしている役割が、余程のことがない限り変化しないであろうことから、国際的な場面での使用はこれからも続くと思われる。しかし、「スワヒリ語がより発展し、近代世界に十分対処できる言語となっていくに従って、英語は、これまで担ってきた役割をスワヒリ語に譲ることになる」[19]と思われる。残るコードスイッチの問題は、スワヒリ語の語彙の整備との関わりが大きいことから、次節で論じていくこととする。

（第４節）学術専門用語の問題

第二章・第１節で述べたように、学術専門用語の不足が、ＳＳ以上の高等教育機関での教授用言語を、英語からスワヒリ語へ転換することを遅らせている大きな要因の一つである。このことはしばしば、「（スワヒリ語は）英語のように国際的な役割を果たす言語ではないし、ＳＳの教授用言語として（英語の代わりに）採用すれば、タンザニア人のための「外界への窓」を閉めることになるだろう」[1]という考え方とも相俟って、「スワヒリ語では表現できない概念があると考える人さえいる」[2]のである。既述のように、ここ20年ほどの社会言語学的な変化から、タンザニアにおけるスワヒリ語の地位は、独立直後か

ら比べると、かなり上がったと言える。しかし、「教育に関して言えば、英語がまだまだ支配的な言語であり」[3]、「高等教育を受けたエリート層や、政府高官の間にはびこる、スワヒリ語に対する否定的な態度を一掃することはできていない」[4]のが実情である。

学術専門用語に焦点を当てた場合、決してスワヒリ語は高等教育の教授用言語に適さない言語ではない。と言うのも、「大学の講師や教授といった、いまだにスワヒリ語を蔑んでいる、高等教育を受けたエリート達の中にさえ、大学の内外を問わず、会話の媒介言語としてスワヒリ語を使用する者が多く、また実際に、自分達の講義内容をより良く理解させるために、スワヒリ語の助けを借りるということも珍しくない」[5]からである。現実に、どのような言語であっても、生活の一切の現象を表現できない言語などないのであり、生きた言語は、常に変化していくものである。その変化は、異文化との接触などによって引き起こされることが多いが、例えば借用や造語によって、その語彙の幅を広げるということは、ごく自然なことなのである。英語がラテン語、ギリシャ語、フランス語などから、多数の語彙を借用していることは、そのほんの一例にすぎない。「何かを表現する必要に迫られれば、その言語の話者によって、表現方法があみだされるはずなのである。ところがスワヒリ語の場合は、昨今の言語政策が障害となって、思うようにその必要が生じていない」[6]のである。従って、スワヒリ語の学術専門用語に関する一番の問題は、不足していることであるというよりも、「多くの語彙が造語されているにも関わらず、それらが作成者や言語学者などの専門家達の間に埋もれてしまっている」[7]ことなのである。小学校教育では、各教科である程度の学術専門用語が使用されている。しかし、ＳＳに上がった少数の生徒達は、せっかく小学校時代に学んだスワヒリ語の用語を土台とすることもなく、新しい教授用言語である英語の概念で、一からまた学びなおさねばならないのである。

更に、いつまでもＳＳ以上の高等教育での教授用言語が転換されないことから、もう一つ別の問題が起こっている。タンザニアでは70年代から80年代前半を通して、高等教育でのスワヒリ語の使用に備え、学術専門用語の整備に力を入れるよう、政府がイニシアチブをとっていた。ところが、「政府によって教授用言語の転換が、1984年に公式的に見送られてしまった」[8]ことにより、「スワヒリ語学術専門用語の開発スタッフは、それまでの10年間にしてきた仕事が、もはや不必要なものとなってしまったと感じ」[9]、「一体いつ、誰、あるいは制度によって、どれくらい待てば使用が決定されるのかわからないのに、これ以上スワヒリ語の学術専門用語を精密に作成していくことに、情熱を感じなくなってし

まった」[10]のである。こういった問題があるにせよ、これから先もなお、スワヒリ語の学術専門用語の近代化は、推進される必要がある。それは、ますます増え続けている、政治機関や公的行事でのスワヒリ語使用、あるいは、公式的には見送られているとは言え、消えるどころか大きくなってさえいる、高等教育機関の教授用言語転換の動きからも、決してないがしろにできないことが明らかである。しかも、「スワヒリ語を、アフリカ統一機構、東・中央アフリカ地域の公共機関の運用言語にしようという強い意向があり」[11]、このことを早期実現するためにも語彙の整備は欠かせない問題であり、従って、学術専門用語の開発スタッフを再度鼓舞することが、政府にとって急務なのである。

さて、スワヒリ語の語彙の近代化に対する要求が明らかになったところで、これまでに行なわれてきた学術専門用語の開発の実際を見ていくことにしよう。

まず、W.H.Whiteleyはその著書の中で、言語政策には「イデオロギー的側面」と「技術的側面」があり、スワヒリ語の造語問題がその「技術的側面」に付随する問題の一つであると述べている。[12]Whiteleyが言及しているのは50年代から60年代にかけての状況であるが、この頃から既に、現在も大きな問題となっている「造語方法と意味の揺れ」が見受けられる。例えば、Whiteleyが取り上げているのは、-chum（もぎ取る、摘む）という語根を持つ動詞から派生した、uchumi(経済)という語である。もともとの「摘む」という意味から派生して、60年代初めには、「利益を得る、有益な事業を行なう」という第二の意味が確立されたが、これに加えて、60年代後半には、uchumiという名詞形になって、「経済、商業」という第三の意味でも使用されるようになったのである。このことによって、使用するコンテキスト、あるいは使用する人により、その指し示す属性が異なってしまうという問題が起こるようになった。Whiteleyは1965年から1966年にかけて、uchumiという語の使用状況についての調査を行なっている。その結果、この語の使用がかなり混乱していることが明らかになり、例えば英語からスワヒリ語に翻訳する場合でも、その翻訳がもとの英文から意味がずれたり、誤解を生じることになってしまうことを指摘している。このようなことを鑑みて、「急速な言語的、政治的変化を無視して、近代の複雑な経済的問題を解決することはできない。また、言語は、明確な方法で必要とされる概念の範囲に対応するためには、必要不可欠なものであるから、経済学者、言語学者、及び英語とスワヒリ語を母語とする人々が価値ある学術専門用語を作成できる、特別な委員会を設置する必要がある」[13]とまとめている。

Whiteleyがuchumiについての調査を行なったのと前後するように、法律用語の整備も行なわれている。国民側から、政府広報や法律に関する書物などを英語ではなくスワヒリ語で書き著わしてほしいという要望が出たこともあり、Kaluta Amri Abeid が中心となって、法律用語の翻訳に携わる委員会が組織された。この委員会は、Mathias E. Mnyampala、A. B. Weston、Jan Knappert、Hemed Mbwana、Seif Nassor Shariaryといった研究者達他によって構成され、1963年から65年まで作業を進め、67年にはスワヒリ語法律用語辞典が出版されるに至ったのである。[14] このことにより、それまでは少数のエリート達にしか理解できなかった、司法分野での難解な語句が、一般大衆にもよりわかり易くなったのである。

学術専門用語の開発は、主に二つの機関が司っている。1964年に、領土間言語（スワヒリ語）委員会から名称を改め、ダルエスサラーム大学に設置された「スワヒリ研究所(Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili)」と、1967年に設立された、「国語審議会(Baraza la Kiswahili la Taifa)」である。スワヒリ研究所は、文学部門、出版部門、言語学部門、辞書部門の四つの部門にわかれているが、その中の辞書部門において、スワヒリ語－英語辞書、英語－スワヒリ語辞書をはじめ、様々な学問の語彙集を編集している。国語審議会の方は、その設立時から語彙の開発に力を入れてきており、1974年には企業や工場で使用される語彙を収録した「スワヒリ訳語集(Tafsiri za Kiswahili)」を、また1976年には、地理学、言語学、科学などの語彙を収録した「標準訳語集(Tafsiri Sanifu)」を出版している。標準訳語集の方は、今もなお多分野にわたって編集が続けられている。

両機関共に語学の専門家が開発に携わっており、常識的に考えれば、スワヒリ語の学術専門用語は順調に増え続け、一般大衆にも浸透するはずである。ところが、「この作業は満足できるものからはほど遠い」[15] という見解がある。それには四つの問題があるとされている。まず、「様々な学問の分野に対応できる学術専門用語の数が非常に限られている」[16] ことがある。例えば1981年に音声学の用語がたった１８２語しかなかったという事実がある。次に「造語された用語の中には、でたらめに作成されたものもあり、従って、一貫性がなく（使用に）混乱を招くものとなっている」[17] ことがある。第三に、「語彙を作成するのに非常に長い時間がかかり」[18]、最後に、「公認の語彙リストの普及率が非常に低い」[19] ということがある。問題の中の「作成方法に一貫性がなく、使用に混乱を招くものとなっている」ことに着目してみると、スワヒリ語語彙の近代化のプロセスが、残念

ながらまだ初期段階にあると言える。例えば、スワヒリ研究所では、「フリー・ターム・トランスレーション(Free Term Translation)」という方法論を用いて、主に英語の学術専門用語に見合うスワヒリ語の語彙を探すことに力を入れているが、この方法論では莫大な時間がかかる上に、翻訳された語彙がアルファベット順に並べられていくために、関連語彙の相互関係やもともとの概念などが無視されてしまうのである。[20] また、「既存の学術専門用語が一貫性がなく、混同しやすいものであるのは、それらを作成していくための指針が不明瞭で矛盾しているからでもある。」[21] 国語審議会では、語彙の近代化を進めていくにあたり、語源にする言語（あるいは言語群）を、1．スワヒリ語または標準語以外の諸方言。2．バンツー諸言語。3．他の（バンツー語以外の）アフリカ諸言語。4．諸外国語。の順で定めているが、実際、スワヒリ語以外の言語の語彙に関する調査は、ほとんどなされていないのが現状であり、第一、専門用語を必要とする学問では、そういった言語を使用していないのである。また、外国語からの借用方法、スワヒリ語の音韻形式との対応も一貫性がなく、かなり複雑になっている。[22] (以下に、造語された学術用語の中で、一貫性に欠ける例を挙げておく。) [23]

〔例1〕フリー・ターム・トランスレーションによって起こる混乱

kilele : climax(漸層法)

mpomoko : anticlimax(漸降法)

＊英語から翻訳されたスワヒリ語の語彙は、アルファベット順に並べられるが、元々の語同士の相関関係は無視されている。

〔例2〕音韻対応における混乱(Ⅰ)

fizikia : physics(物理学)

fonolojia : phonology(音韻論)

etimolojia : etymology(語源学)

＊英語で「…学(論)」の概念を表わす場合、'-ics'か'-ology'が語末に来るが、スワヒリ語の対応語は、そのどちらもが '-ia'を語末にしてしまっている。

〔例3〕音韻対応における混乱(Ⅱ)

fonetiki : phonetics(音声学)

akustika : acoustics(音響学)

prosodi　：　prosody(韻律学)

＊〔例２〕から考えると語末に '-ia' を付加するはずの語が、'-a' や '-i' で終わってしまっている。

タンザニア政府の言語政策推進の先頭に立っているはずの国語審議会でさえ、今もってこの状況を変革できずにいる。しかも、国語審議会と他の研究機関との間に確かな協力体制がないことが、新しく造語された語彙の普及を遅らせている大きな要因となっているのである。[24]

このように見てくると、スワヒリ語の語彙の近代化は、問題ばかりで前進がないように思えるかも知れない。特に、本章第３節で触れたように、専門用語が不十分であるために起こるコードスイッチは、スワヒリ語の言語的優位性を脅かす深刻な問題ともなりかねない。だが、このコードスイッチに関しては、次のような意見も述べられている。「学術専門用語に関して言及する場合に起こる、スワヒリ語と英語の間でのコードスイッチは、教育において二言語併用を行なうタンザニアの、この特殊な発展段階におけるごく自然な表現方法、言い換えれば通常の表現方法だと考えるべきである。（教師も生徒も、コードスイッチを行なった場合には、不当に非難されるべきではないし、そのコードスイッチが不適当だなどと感じる必要もない。コードスイッチという行動には、かなりの言語的能力が含まれるという十分な証拠がある。）」（下線筆者）[25] 実際問題として、新しく造語されたスワヒリ語の語彙よりも、それまで使い慣れてきた英語の語彙の方が、論議の場などでは咄嗟に出てきやすいということもあろう。スワヒリ語の専門用語が作成されたからと言って、一朝一夕にそれらが英語の用語にとって代わるということは、現在の状況からは不可能であるし、不自然でもある。しかし、現在はあくまでも「発展段階」である。ごく限られた範囲にしか浸透していないスワヒリ語の学術専門用語を、更に広い範囲にまで浸透させていくことができれば、コードスイッチの状況にも変化が生じてくると思われる。第二章・第１節で述べたように、常に前向きに考えていくことが必要である。各章で考察してきた、スワヒリ語が「国家語」として抱えている様々な問題は、とりもなおさず「語彙の近代化」ということにつながっている。従って、「昨今の言語政策が、スワヒリ語語彙の近代化を明らかに妨げるものであっても、特に教育的目的のために、語彙研究者達に課せられている任務は大きいのであり、彼らの実践的な解決策を必要とする、理論的且つ方法論的な大問題が山積しているのである。」[26] 一部の専門家達の中で埋もれている、新しく

造語された語彙を普及していくには、語彙研究者達の中での情報交換や、各研究機関相互の協力関係もさることながら、作家などの努力も大いに影響力があるであろう。[27] いずれにせよ、これからのスワヒリ語の発展の大きな鍵となる「有効で一貫性のある学術専門用語は、明確な指針のもとであれば作成できるはずである。」[28] 政府のこれからの対応に注目していきたい。

【おわりに】

結びに入る前に、今一度「国家語」としてのスワヒリ語が直面する問題を整理してみたい。

まず第一に、現在の標準スワヒリ語が、「外から標準化された」言語である、という問題があった。この標準化によって、スワヒリ語は、一民族の伝統文化を運ぶ「生活語」としての側面をある程度犠牲にして、それと引き換えに「国家語」の地位を手に入れたのである。次に、「国家語」となったスワヒリ語に対する、政府のあいまいな政策があった。ここで大きく問題となるのは、ＳＳ以上の高等教育機関での教授用言語の転換と、そのことに大きく関わる、学術専門用語の整備の問題である。どちらも、これから先、スワヒリ語があくまでもタンザニアの「国家語」として発展していくのであれば、未解決のままにはしておけない点である。更に、上の二点に関連して、英語との競合という問題もあった。既に単なる「外国語」へと格下げされているとは言え、「世界語」としての英語の力は、まだまだスワヒリ語の地位を脅かすものである。そして、おそらくこのことが、タンザニアの言語政策において最も見逃され易く、また、避けられている点であろうが、スワヒリ語とそれ以外の民族諸言語との、好ましい相関関係を打ち立てるということが、言わば多言語、多民族国家のタンザニアにとって、難点になっているのではないだろうか。

「民族」と「言語」の問題について考察する場合、もし仮に一民族一国家という図式が成り立っていれば、民族とそれに付随する言語（＝その民族にとっての「母語」）の立場を、それほど意識する必要はないかも知れない。もちろんそのような場合でも、例えば、「標準語」に認定された一方言とその他の方言間で、ある種の溝ができてしまう、あるいは強制的に作られてしまうことは、この日本においても、方言撲滅運動などがあったこと

からも明らかである。しかし、多言語、多民族国家にあっては、一つ一つの民族とその言語の定義そのものが、「国家」と「国家語」という大きな権力に対峙する、非常に重要なものとなってくるのである。民族の母なることばである「母語」が、「国家という言語外の政治権力からも、文化という民族のプレスティージからも自由で」[1]、「何よりも、国家・民族・言語、この三つの項目のつながりを断ち切って、言語を純粋に個人との関係でとらえる視点を提供してくれる」[2]のに対し、近代文明国家の一つの指標でもある「国家語」は、「手段としての言語の共通、共有による国民的平等という理念によって、現実の言語的不平等をおおいかくし、こうして生まれた単一独占言語を神聖化することによって、単に言語的な多様性を許さないだけでなく、やがては文化の多様性にも敵対する」[3]イデオロギーを身に纏っている。現在のタンザニアでは、その立場にいささか不安材料が残されているとは言え、まさしく後者はスワヒリ語であり、その他の百を超す民族諸言語が前者に当たる。

実際、タンザニアの言語政策に対する評価は、一般的に見て高いと思われる。それは、タンザニア人自らも指摘するところである。例えば、J.Mwangomango はその「アフリカ全土へのスワヒリ語拡大の期待」という論文中で、次のように述べている。「スワヒリ語こそが、部族主義を消滅させ、タンザニア人の間に同族意識を確立させたのである。…タンザニア及び東アフリカ全体は、この言語を有することで非常に恵まれている。ケニア、ウガンダ、更には他のアフリカ諸国においても、将来この言語を使用することになるであろう。」[4]また、「20世紀におけるスワヒリ語」と題した論文中では、「タンザニアでは、ウジャマー政策の路線に従って、国家の統一、国民の相互理解、そして国家の発展ということにおいて、スワヒリ語は大いに貢献してきた。この言語は、伝統と習慣という点で、アフリカ人の誇りを取り戻すのに役立ってきたのである。」[5]とも述べている。しかし一方で、現時点でのスワヒリ語の発展状況を憂慮する声もある。R.Besha は、「今日のスワヒリ語：特に政治において」という論文を次のように締めくくっている。

> …スワヒリ語の発展に全く問題がないと言っているわけではない。依然として問題は山積している。本を書いたり訳したりするには、金も人材も必要である。しかしこの問題は、仮に英語を「国家語」とした場合でも、持ち上がってくる問題である。…むしろ、現在発展途上国にとって大きな問題となっているのは、国民に対して、先進国の学者たちの賛同など得ずとも、自らの力で全てを行なえることを理解させることで

ある。（発展途上国の国民は）長きにわたって西欧の支配下にあったために、どのような段階においても、指導と援助がなければ、自分たちでは意味ある業績はあげられないと信じ込まされている。このことは、言語問題においても然りである。発展途上国の人々は、この世に二種類の言語があると長い間信じてきた…英語のような発展と学問に使用される言語と、スワヒリ語、ハヤ語、チャガ語、サンバー語のような…生活言語としてしか役立たない言語があると…（しかし）この考え方はまさしく大きな敵であり、これらを克服しなければ、発展途上国の本当の意味での発展は訪れないのである。[6]

これらの見解は、楽観派か慎重派かを考慮しなければ、いずれもスワヒリ語を「国家語」とする現在のタンザニアの言語政策を、それぞれの立場から擁護するものである。

言語政策における問題で、昨今指摘されていることは、ほとんどが英語との関係についてである。既に述べてきた通り、スワヒリ語を「国家語」として、その力を増大させる政策をとりながらも、旧宗主国語である英語の立場を明確にできずにいることが、現在のタンザニア政府が抱える最も大きな問題だとされている。そしてこの問題を解決するために、特に教育という最も国民の生活に密接な分野に関して、多くの知識人たちが様々な具体的提案を行なっているのである。ＳＳ以上の高等教育機関での英語能力の低下に対処するためには、教授用言語を英語からスワヒリ語へ転換させねばならなくなっていること、しかも、小学校からＳＳへの進学は、全ての児童に平等な権利であって、決して両親の経済的、社会的地位の高低に左右されてはならず、これからの進学システムは、児童の能力を重視したものに変更すべきである[7]との指摘には、従来英語をエリートのための言語としてきた制度に対する、辛辣な批判も込められている。また、現在の小学校教育における一教科としての英語の授業を排除し、一層一教科としてのスワヒリ語と、スワヒリ語を教授用言語とする他教科の授業に力を入れることも、同時に指摘されている。[8]第三章・第３節で示したように、もはやタンザニアの社会言語学的状況は、英語ではなくスワヒリ語を必要としているのであり、知識人たちの提案も、その状況を考慮して行なわれていることは明白である。そしてその根底にあるのは、やはり既述のBesha の見解と同様に、「もしも、将来的にも西欧の旧宗主国の技術力に、広い範囲にわたって依存し続けるならば、アフリカ諸国は真の意味での発展を遂げることはできないであろう。」[9]という考え方である。一民族語から近代国家語へと歩みつつあるスワヒリ語は、まさしく西欧の旧宗主国の技術

力からの脱却の糸口と成り得る。諸問題解決のための提案は、その歩みを促進する助力となるであろうことは言うまでもない。

しかし、ここで再び「民族」と「言語」の問題に立ち返りたい。再三述べてきたように、「国家語」であるスワヒリ語と、その他の民族諸言語との関係について、英語とスワヒリ語との関係ほどには議論が展開されていない。まるでそのことに触れるのは、国家的タブーであるかのごとく、論じられるのはスワヒリ語の発展に関係することのみである。だが、これから更にスワヒリ語が「国家語」として発展していくためには、その陰で話者数を減少させられる運命にある少数民族の母語を、決して無視してよいというわけではない。旧ソ連の民族と言語の問題に関連した田中の論述を借りれば、タンザニアでは、非スワヒリ諸民族の思想、生活、文化全般にわたるスワヒリ化[10]を徹底して行なえば、多民族状況は解消され、近代国家としての理想的な統一が、もたらされることになるはずである。旧ソ連において、「民族語が、学校、職場、集会、放送、出版等の公的領域から撤退し、自らの「社会的機能」を「家庭内のコミュニケーションの場」に局限しつつ、これらの場における社会的機能をほとんど全面的にロシア語にゆだねて行くプロセスは、ソビエトの言語状況の「発展」と理解され」[11]ていたようであるが、このことは現在のタンザニアにも通じる部分がある。それ自体を「善」か「悪」かで判断することは不可能であるが、少なくとも出発点は「民族の母語」という同じラインであったものが、「国家」という権力が加えられたかそうでないかによって、社会的、経済的地位に大きな差異が現れていることは認めなくてはならない。

旧ソ連邦の解体、旧ユーゴスラビアの民族対立など、民族の存亡に関する問題がクローズアップされている一方で、情報網の拡大や交通機関の充実により、世界という一つのまとまりも、以前より更に意識されるようになっている。アフリカ諸国は、このような混沌とした状況の中で、今なお近代文明国家としての発展を模索中である。そして、その発展の鍵となる「国家語」の選択が、否応なくその国家の進むべき道を決定することになる。タンザニアは、率先して「国家語」としてアフリカ固有の言語であるスワヒリ語を選択した。そのことは、大半のアフリカ諸国が旧宗主国語を選ばざるを得ない状態であるのに比して、恵まれていることだとしなければならないだろう。しかし、逆に言えば、旧宗主国語を選ばなかったからこそ、同じアフリカ固有の民族諸言語の間で、言語的優位性の格差が開いたことになる。スワヒリ語は、アフリカ統一機構での使用言語にしよう、あるいは、

アフリカ大陸全体のリンガフランカにしようという声が上がるほど、その地位も力も増大し始めている。だが、タンザニア国内の言語状況を鑑みれば、スワヒリ語が置かれている立場は、決してそれほど楽観的なものではない。英語との競合に効果的に打ち勝ち、近代国家の指標である「国家語」として、高等教育に対応し、学術専門用語も整備された、アフリカの新しい文化の担い手としての側面を提示しながら、スワヒリ以外の民族の伝統、習慣、文化といったものをも運ぶことができる、言わば「諸民族統合」の手段としての役割も果たしていかねばならないであろう。タンザニアの言語政策が、スワヒリ語にこの両方の性格を与えることができて始めて、「アフリカ大陸における効果的言語計画の好例」という称号を得ることができるのだと思われる。「国家」と「民族」と「言語」の接点としてのスワヒリ語の、真の意味での正念場は、むしろこれからなのである。

(補記)

本論文は、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻アラビア語コースに提出した、1991年度の修士論文『民族語から近代国家語への歩み ── タンザニアにおけるスワヒリ語の役割 ── 』に、修正、加筆、削除を行なったものである。

〔各章の注〕

【はじめに】

1）この論文中では、いわゆる英語の'National Language'について、その日本語訳とも言える「国語」という言葉の持つ、単なる「くにのことば」というあいまいさを排除し、「義務教育その他の、国家権力の行使によって行政的に採用されて課されるところの、政治的特権を与えられた特定民族語」(田中 1978, p.158) という概念をはっきりと示すために、あえて「国家語(Staatssprache)」という訳語を当てている。(田中 1978, pp.139～187 参照)

2）「国家語」と「公用語」には、基本的に「議会運用言語」の立場を与えられている言語とそうでない言語という違いがある。更に、「国家語」は国内全体の共通語としての性格を帯びているのに対し、「公用語」は、ある場合には、ある限られた地域内の共通語となっていることもある。例えばザイールでは、「国家語」はフランス語であるが、「公用語」としては、国内を四つの地域に分割して、その地域内の有力言語であるリンガラ語、ルバ語、コンゴ語、スワヒリ語を当てている。

3）同様にスワヒリ語を「国家語」としているにもかかわらず、ケニアの場合は様々な要因が重なっているために、タンザニアとはその言語政策の現状が異なっている。その違いについては、第一章・第２節を参照されたい。

4）クルマス 1987, p.182

5）この論争の発端となったのは、"Africa Events" February 1988に掲載された、S. Yahya-Othmanの 'When International Languages Clash(国際的言語同士が衝突する時)'という論文である。この論争については、第三章・第１節を参照されたい。

6）アフリカのEthnic Groupを指すために長きにわたって使用されてきた「部族」という言葉には、原始的なもの、未開なもののイメージがついてまわってきた。同様に、その「未開な」人々が話す「部族語」にも、遅れた言語、価値の低い言語という概念が付与されてきた。この論文中では、そういったアフリカの民族集団とその母語に付与されてきた差別的な概念を払拭するために、「部族」を「民族」、「部族語(Tribal Language)」を「民族語(Ethnic Language)」と呼ぶことにする。

例えば、『アフリカ学への招待』（米山俊直．1986年．日本放送出版協会。）を、同

様の立場を取る文献として参照されたい。

【第一章】

（第１節）

1）Whiteley 1969, p.42

2）Whiteley 1969, pp.48～49

3）Whiteley 1969, pp.52～53

4）現在でも広く一般に使用されている、“A Standard Swahili-English Dictionary”と、“A Standard English-Swahili Dictionary”(1939. F.Johnson. Oxford University Press) は、これらマダンの編集した辞書を土台としている。

5）この「インドのシーディーの人々」とは、インド西部のボンベイ州の都市であるアーマダバードの南西、約200マイルほどに位置する、カチアワル半島内の森林地帯の共同体に生活する人々のことである。(Whiteley 1969, p.52 参照)

6）Whiteley 1969, p.54

7）他のミッションの主要拠点と設置年を併記しておく。(Whiteley 1969, p.53 参照)

ＵＭＣＡ：ザンジバル 1864年、マギラ 1875年、マサシ 1876年

ＣＭＳ：ムプヮプヮ 1876年

ＦＨＧＦ(French Holy Ghost Fathers)：ザンジバル 1863年、バガモヨ 1868年

ＬＭＳ(London Missionary Society)：ウジジ 1877年

ＷＦ(White Fathers)：タボラ 1878年

8）現在のケニアでも、第四の人口を擁するカンバ人をはじめ、いくつかの民族が、当時の内陸交易に従事しており、沿岸から内陸にアラブ商人を介しての交易が浸透する余地は、ほとんどなかったと思われる。但し、このことに関してR.Ohlyは、別の見解を示している。「内陸側から（沿岸部へ）の人口流出により、スワヒリ社会の分化が引き起こされ、その結果、スワヒリの商人たちと内陸の部族民たちとの、直接的な経済協調関係、すなわち日用品等の交換が行なわれるようになった。それは、伝統的に(交易の)仲買い人として携わっていた、カンバ人、ヤオ人、ニャムウェジ人などを無視することになったのである。」(Ohly 1982, p.35)

（第２節）

1）ここで挙げた三人の主な著書を以下に示す。

C.Velten ＊1904. Praktische Suaheli-Grammatik nebst einem Deutsch-Suaheli Wörterverzeichnis, Berlin.

＊1907. Prosa und Poesie der Suaheli, Berlin(Selbstverlag).

＊1910. Suaheli-Spracheführer für Postbeambte, Berlin(Selbstverlag).

C.Büttner ＊1887. Hilfsbüchlein für den ersten Unterricht in der Suaheli-Sprache, und für den Selbstunterricht, Leipzig.

＊1890. Wörterbuch der Suaheli-Sprache, Suaheli-Deutsch und Deutsch-Suaheli, Stuttgart-Berlin.

＊1892. Suaheli-Schriftstücke in arabischer Schrift, Stuttgart-Berlin.

A.Seidel ＊1890. Eine praktische Grammatik der Suaheli-Sprache auch für den Selbstunterricht, Wien-Leipzig.

＊1900. Schlüssel zur "Suahili Konversations-Grammatik", Heidelberg.

＊1902. Suahelisprache, Heidelberg.

2）Whiteley 1969, pp.59～60 参照。

3）スワヒリ語による最初の新聞である。(Whiteley 1969, p.60 参照。)

4）Whiteley(1969) は、年号について確証がないために疑問符をつけているが、Maganga (1983a, p.94) は何も施していない。また、これは現タンザニアの内陸側(マギラ)で発行された最初の新聞である。(Maganga 1983a, p.94 参照。)

5）Whiteley 1969, p.60 参照。

6）Whiteley 1969, p.60 参照。

7）"A Standard Swahili-English Dictionary"(1939. F.Johnson. Oxford University Press)によると、「akida：軍隊の指揮官。但しタンガニーカ領時代には、ある一定地域の監督を任されたアラブ人またはアフリカ人のことを指していた。またある場合には、単に植民地総督府の伝達官、またはアフリカ人首長の従者を指す。」とある。また、"Kamusi ya Kiswahili Sanifu"(1981. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam. Oxford University Press)によると、「akida：１．軍隊の指揮官。２．植民地時代の行政区長に仕える下級役人。」とある。

8) Whiteley 1969, pp.60～61

9) Mwangomango 1972, p.14

10) この状態が現在も続いている。これに関しては、第二章・第１節を参照されたい。

11) 現在、少しずつ変容が見られる。これに関しては、第三章・第３節を参照されたい。

12) Whiteley 1969, p.61

13) Massamba 1991, p.7, pp.13～16 参照。

14) Whiteley 1969, p.61 参照。

15) 「保守的な」民族とは、スクマ、ムブル、ハ、ニャキュサなどである。(Whiteley 1969, p.61 参照。) Massamba 1991, p.13も合わせて参照のこと。

16) Whiteley 1969, p.65 参照。「年代記」と呼ばれるもので有名なのは、「ラム年代記」と「パテ年代記」であり、それぞれラム方言、パテ方言で書かれている。

17) Whiteley 1969, p.65

18) Whiteley 1969, p.66

19) ムタヒ 1990, p.78 参照。

20) Whiteley 1969, p.66 参照。

21) ムタヒ 1990, p.78 参照。

22) ムタヒ 1990, p.78 によると、この20年間、宣教師たちはアフリカ人学校ではスワヒリ語を使用していたのである。

23) Whiteley 1969, p.66 並びに、ムタヒ 1990, p.78 も参照のこと。

24) Whiteley 1969, p.66

25) ムタヒ 1990, p.78

26) ムタヒ 1990, p.78

27) ムタヒ 1990, p.78

28) ムタヒ 1990, p.79 参照。

29) ムタヒ 1990, p.79

30) Kenya Population Census, 1979 1981, p.131

31) Polomé 1980, p.3

32) Polomé 1980, p.21

33) Polomé 1980, p.21

34) ケニアの独立前後の言語政策（特にＫＡＮＵ(Kenya African National Union)の動き）については、ムタヒ 1990, pp.78～88 を参照されたい。

（第３節）

1）統治領における教育言語のために、リンガフランカの決定は最重要事項であった。スワヒリ語は、東及び「赤道」アフリカの広範囲にわたって、既に支配的言語であるという価値が認められ、最もふさわしい言語として選択されたのである。(Whiteley 1969, p.79 参照。)

2）Whiteley 1969, p.81

3）Whiteley 1969, p.82

4）Whiteley 1969, pp.82～83

5）Whiteley 1969, p.82 参照。

6）Whiteley 1969, pp.83～84 参照。

7）この改訂された辞書が、F.Johnson編集の辞書である。しかし、Johnsonは作業半ばで没したため、B.J.Ratcliffeが後を継いで出版までを指揮した。(Whiteley 1969, p.84 参照。)

8）Maganga 1983b, p.96 参照。

9）Maganga 1983b, p.96

10) Maganga 1983b, p.96

11) Maganga 1983b, p.97

12) 田中 1978, p.85

13) この研究叢書で言及されている方言は、Kimvita, Kipemba, Chichifundi, Kimtang'ata, Kivumba, Chijomvu, Kingareである。また、これらとは別に、Chimiini(Kibarawa), Kihadimu, Kitikuuについての研究も行なわれた。(Maganga 1983b, p.97 参照)

14) Maganga 1983b, pp.97～98 参照。

15) Maganga 1983b, p.99

16) 田中 1978, pp.284～285

17) Whiteley 1969, p.94

【第二章】

（第１節）

１）Abdulaziz 1980, p.145

２）Abdulaziz 1980, p.145

３）Mbunda, Brown 1980, p.287

４）Rubagumya 1989b, p.9 参照。

５）Batibo 1989, p.54

６）Rubagumya 1989b, pp.8～9

７）Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.26 参照。

８）Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.26

９）Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.31

10）Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, pp.28～29

11）Rubagumya 1989a, p.1

12）Rugemalira 1989, pp.105～117 参照。

（第２節）

（１）例えば、「スワヒリ語の文学は世界に誇るべき大文学ではない。…散文は、民話・伝説あるいは回教の色彩の強い宗教的物語の域を出ない幼稚なものである。…いずれもとりあげるにたる価値のないもの」（五島忠久氏）という批評も見受けられる。（宮本 1991a, p.185）

２）モハメド 1991a

３）宮本 1989a, p.6 参照。

４）Mushi 1968, p.8

５）竹村 1991a 参照。

６）モハメド 1991a

【第三章】

（第１節）

１）Abdulaziz 1972, p.198 参照。

２）Trappes-Lomax 1989, p.98 参照。

3) Rubagumya 1989b, p.10

4)「カヤ」ショップとは、日用雑貨等を扱う、いわゆるスーパーマーケットのことである。

5) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.29

6) Othman 1989, pp.42～53 参照。

7) Senkoro 1988, pp.62～64 参照。

8) Bgoya 1988, pp.55～56 参照。

9) Kaswaga 1988, pp.55～56 参照。

(第2節)

1) Abdulaziz 1980, pp.139～175 参照。

2) Abdulaziz 1980, pp.160～161

3) Abdulaziz 1980, pp.139～175 参照。

4) 豊田 1964, p.23

5) Hemphill 1974, pp.455～476 参照。

6) 宮本 1989b, p.101

7) 福島 1987, p.4

8) 宮本 1989b, p.101

9) グギ 1987, p.59

10) グギ 1987, p.60

11) グギ 1987, p.60

12) ジオルダン 1987 参照。

(第3節)

1) Abdulaziz 1972, pp.197～213 参照。

2) Rubagumya 1989b, p.9

3) Rubagumya 1989b, p.9

4) Rubagumya 1989b, p.9

5) Rubagumya 1989b, p.9

6) ケニアの首都ナイロビに住む、両親がエリートで共働きをしている家庭で育ったギクユ人の子供は、学校でスワヒリ語もしくは英語を使い、普段、家では民族の異なるメイドとスワヒリ語で意志疎通をはかるため、本来の母語となるべきギクユ語がほとん

ど理解できないという状況にまでなっていることもある。

7) Rubagumya 1989b, p.10 参照。

8) Rubagumya 1989b, p.10 参照。

9) Batibo 1989, p.62

10) Batibo 1989, p.62 参照。

11) Batibo 1989, p.62 参照。

12) Rubagumya 1989b, p.11

13) Rubagumya 1989b, p.12

14) Rubagumya 1989b, p.12

15) Rubagumya 1989b, p.12

16) Rubagumya 1989b, p.12

17) Rubagumya 1989b, p.12～13 参照。

18) Rubagumya 1989b, p.13

19) Rubagumya 1989b, p.13

(第4節)

1) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.31

2) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.30

3) Massamba 1991, p.11

4) Massamba 1991, p.11

5) Massamba 1991, p.12

6) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.30

7) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, p.30

8) Mwansoko 1989, p.134

9) Mwansoko 1989, p.134

10) Mwansoko 1989, p.134

11) Mwansoko 1989, p.135

12) Whiteley 1969, pp.114～128 参照。

13) Whiteley 1969, p.125

14) Mwangomango 1972, p.19

15) Mwansoko 1989, p.135

16) Mwansoko 1989, p.135

17) Mwansoko 1989, p.135

18) Mwansoko 1989, p.135

19) Mwansoko 1989, p.135

20) Mwansoko 1989, pp.135～136 参照。

21) Mwansoko 1989, p.136

22) Mwansoko 1989, p.136 参照。

23) Mwansoko 1989, pp.136～137 参照。

24) Mwansoko 1989, p.138 参照。

25) Rugemalira, Rubagumya, Kapinga, Lwaitama, Tetlow 1989, pp.32～33

26) Mwansoko 1989, p.141

27) 竹村 1991b 参照。

28) Mwansoko 1989, p.140

【おわりに】

1) 田中 1981, p.44

2) 田中 1981, p.44

3) 田中 1978, p.287

4) Mwangomango 1970, p.50

5) Mwangomango 1972, p.21

6) Besha 1972, p.35

7) Rubagumya, Lwaitama 1989, p.147 参照。

8) Rubagumya, Lwaitama 1989, p.149 参照。

9) Rubagumya, Lwaitama 1989, p.151

10) 田中 1978, pp.228～234 参照。

11) 田中 1978, p.263

〔参考文献〕

(外国語文献)

Abdulaziz,Mohamed H. 1972. "Triglossia And Swahili-English Bilingualism in Tanzania" Language in Society, pp.197～213, Cambridge University Press.

Abdulaziz,Mohamed H. 1980. "The Ecology of Tanzanian National Language Policy" Language in Tanzania (Edgar C.Polomé and C.P.Hill,eds.), pp.139～175, Oxford University Press.

Achebe,Chinua. 1976. "The African Writer And The English Language" Morning Yet On Creation Day, pp.74～84, New York, Anchor Press.

Akida,Hamis. 1983. "Ukuzaji na Uendeshaji wa Msamiati wa Kiswahili" Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.113～143, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Allen,J.W.T. 1959. "The Collection of Swahili Literature And Its Relation to Oral Tradition And History" Tanganyika Notes And Records No.53, pp.224～227, Tanganyika Society.

Archbold,M.E. 1972. "Kukua Na Kuenea Kwa Kiswahili Katika Mkoa wa Tanga" Swahili Vol.42/1, pp.58～63, Institute of Kiswahili Research.

Batibo,H.M. 1989. "English Language Teaching and Learning in Tanzanian Primary Schools" Language in Education in Africa, pp.54～74.

Bertoncini,Elena Zubkova. 1989. Outline of Swahili Literature E.J.Brill, Leiden.

Besha,R. 1972. "Lugha ya Kiswahili Hivi Leo; Hasa Katika Siasa" Swahili Vol.42/1, pp.22～38, Institute of Kiswahili Research.

Bgoya,Walter. 1988. "About Turn!" Africa Events, September 1988, pp.55～56, Dar-es-Salaam Limited.

Bryan,M.A. 1959, "Swahili Group" The Bantu Languages of Africa, pp.126～129, Oxford University Press.

Central Bureau of Statistics. 1981. Kenya Population Census, 1979.

Denny,Neville. 1963. "Languages and Education in Africa" Language in Africa

(Robert G.Armstorong, L.F.Bronsnahan and John Spencer, eds.), pp.40～52, London, Cambridge University Press.

Heine,Bernd and Möhlig,Wilhelm J.G. 1980. "Part 1. Geographical and Historical Notes" Language and Dialect Atlas of Kenya Vol.1 (Bernd Heine and Wilhelm J.G. Möhlig,eds.), pp.11～58, Berlin, Dietrich Reimer Verlag Berlin.

Hemphill,R.J. 1974. "Language Use and Language Teaching in the Primary Schools of Kenya" Language in Kenya (W.H.Whiteley, eds.), pp.455～476, Oxford University Press.

Hill,T. 1973. "The Primary Dialects of Swahili: An Approach to a Linguistic-Geographical Survey" Swahili Vol.43/2, pp.7～18, Institute of Kiswahili Research.

Kaswaga,Ben. 1988. "English Language･･･an Enemy?" Africa Events, December 1988, pp.55～56, Dar-es-Salaam Limited.

Khamisi,A.M. 1974. "Swahili as a National Language" Towards Ujamaa, pp.288～308, East African Literature Bureau.

Khamisi,Abdu Mtajuka. 1983. "Kiswahili Ikiwa Ni Lugha ya Kimataifa" Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.1～11, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Khatib,Mohammed Seif. 1983. "Historia na Maendeleo ya Kiswahili Zanzibar" Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.19～50, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Lwaitama,A.F. , Rubagumya,C.M. and Kapinga,M.K. 1989. "On the History of English Language Teaching in Tanzania: Three Theses" Language in Education in Africa, pp.15～24.

Lwaitama,A.F. and Rugemalira,J.M. 1989. "The English Language Support Project in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.36～41.

Maganga,Clement. 1983a. "Juhudi za Ukuzaji wa Kiswahili Tanzania Bara" Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.93～105, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Maganga,Clement. 1983b. "Maendeleo ya Matumizi ya Kiswhili Tanzania Bara" Makala

za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.106～112, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Massamba,D.P.B. 1991. Thirty Years of Kiswahili Development in Tanzania IKR, University of Dar-es-Salaam.

Mazrui,Al-Amin M. 1978. "The Religious Factor in Language Nationalism — the Case of Kiswahili in Kenya" Studies in African Linguistics, Volume 9,Number 2, July 1978, pp.223～231, The Department of Linguistics and the African Studies Center, University of California.

Mbuguni,L.A. and Ruhumbika,G. 1974. "TANU and National Culture" Towards Ujamaa, pp.275～287, East African Literature Bureau.

Mbunda,Fulgens and Brown,David. 1980. "Language Teaching in Primary Schools" Language in Tanzania (Edgar C.Polomé and C.P.Hill,eds.), pp.283～305, Oxford University Press.

Mbunda,Fulgens, Brumfit,C.J., Constable,D. and Hill,C.P. 1980. "Language Teaching in Secondary Schools" Language in Tanzania (Edgar C.Polomé and C.P.Hill, eds.), pp.306～339, Oxford University Press.

Mhina,G.A. 1972. "Problems Being Faced in the Process of Developing African Languages with Special Reference to Kiswahili" Swahili Vol.42/1, pp.43～57, Institute of Kiswahili Research.

Mkude,Daniel J. 1983. "Mtawanyiko wa Lahaja za Kiswahili" Makala za Semina ya Kimataifa ya Waandishi wa Kiswahili I — Lugha ya Kiswahili, pp.62～83, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar-es-Salaam.

Mushi,S.S. 1968. "The Role of Swahili Books in Nation-Building Endeavours" Swahili Vol.38/1, pp.3～8, Institute of Kiswahili Research.

Mwangomango,J.S.M. 1970. "Matumaini ya Kueneza Kiswahili Afrika" Swahili Vol.40/1, pp.46～52, Institute of Kiswahili Research.

Mwangomango,J.S.M. 1972. "Kiswahili Karne ya Ishirini" Swahili Vol.42/1, pp.14～21, Institute of Kiswahili Research.

Mwansoko,H.J.M. 1989. "Swahili Terminological Modernisation in the Light of the

Present Language Policy of Tanzania" Language in Education in Africa, pp.133～142.

Ohly,Rajmund. 1982. Swahili－the diagram of crises, Veröffentlichungen der Institute für Afrikanistik und Ägyptologie der Universität Wien.

Olson,H.S. 1972. "Swahili As Educational Medium" Swahili Vol.42/1, pp.4～13, Institute of Kiswahili Research.

Othman,S.Yahya. 1988. "When International Languages Clash" Africa Events, February 1988, pp.42～45, Dar-es-Salaam Limited.

Othman,S.Yahya. 1989. "When International Languages Clash: The Possible Detrimental Effects on Development of the Conflict between English and Kiswahili in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.42～53.

Parkin,D.J. 1974. "Language Switching in Nairobi" Language in Kenya, (W.H.Whiteley, eds.), pp.189～216, Oxford University Press.

Polomé,Edgar C. 1980. "The Language of Tanzania" Language in Tanzania (Edgar C. Polomé and C.P.Hill, eds.), pp.3～25, Oxford University Press.

Roy-Campbell,Z.M. 1989. "The Training of Secondary School Teachers of English in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.75～93.

Rubagumya,C.M.(eds.) 1989. Language in Education in Africa : A Tanzanian Perspective Multilingual Matters Ltd.

Rubagumya,C.M. 1989a. "Introduction" Language in Education in Africa, pp.1～4.

Rubagumya,C.M. 1989b. "Language in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.5～14.

Rubagumya,C.M. and Lwaitama,A.F. 1989. "Political and Economic Dimensions to Language Policy Options in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.143～152.

Rugemalira,J.M. , Rubagumya,C.M. , Kapinga,M.K. , Lwaitama,A.F. and Tetlow,J.G. 1989. "Reflections on Recent Developments in Language Policy in Tanzania" Language in Education in Africa, pp.25～35.

Rugemalira,J.M. 1989. "The Communication Skills Unit and the Language Problem at

the University of Dar-es-Salaam" Language in Education in Africa, pp.105～122.

Schmied,J. 1989. "Accepted Language Behaviour as a Basis for Language Teaching: A Comparison of English in Kenya and Tanzania" Language in Education in Africa, pp.123～132.

Sedlak,Philip A.S. 1975. "Generational Language Shift and Linguistic Diversity Measures : A Kanya Case" Studies in African Linguistics, Volume 6, Number 1, March 1975, pp.65～76, The Department of Linguistics and the African Studies Center, University of California.

Senkoro,F.E.M.K. 1988. "The Last of the Empire" Africa Events, June/July 1988, pp.62～64. Dar-es-Salaam Limited.

Spaandonck,M.V. 1965. Practical and Systematical Swahili Bibliography－Linguistic 1850-1963. E.J.Brill, Leiden.

Stigand,C.H. 1915. A Grammar of Dialectic Changes in the Swahili Language. Cambridge University Press.

Trappes-Lomax,H.R. 1989. "Can a Foreign Language be a National Medium?" Language in Education in Africa, pp.94～104.

Whiteley,W.H. 1969. Swahili: The Rise of the National Language. Methuen, London.

（日本語文献）

麻田豊. 1987.「民族と言語文化」『もっと知りたいパキスタン』, pp.128～138, 弘文堂。

クルマス,フロリアン. 1987. 山下公子訳,『言語と国家 —— 言語計画ならびに言語政策の研究』岩波書店。

福島富士男. 1987.「アフリカ文学における英語の位置をめぐって」『月刊ａａｌａ』第37号, pp.2～6, 日本アジア・アフリカ作家会議。

泉井久之助. 1970.「標準語の概念について」『言語の世界』, pp.81～89, 筑摩書房。

ジオルダン,アンリ編. 1987. 原聖訳,『虐げられた言語の復権 —— フランスにおける少数言語の教育運動』批評社。

小林素文. 1988.『様々な英語－母語として民族語として－』研究社出版。

小林素文. 1989.『複合民族社会と言語問題』大修館書店。

松下周二．1983．「アフリカの言語」『アフリカハンドブック』pp.284～297，講談社。

宮本正興，岡倉登志編．1984．『アフリカ世界 —— その歴史と文化』世界思想社。

宮本正興．1977．「アフリカの言語状況」『センター通信』第33号，pp.4～8，京都イングリッシュセンター。

宮本正興．1989a．『スワヒリ文学の風土』大阪外国語大学アフリカ研究室。

宮本正興．1989b．『文学から見たアフリカ』第三書館。

宮本正興．1991a．『ことば・文学・アフリカ世界』大阪外国語大学アフリカ研究室。

宮本正興．1991b．『東アフリカ海岸地方の口承文芸とスワヒリ語諸方言の位相に関する研究』平成２年度科学研究費補助金(一般研究Ｂ)研究成果報告書，大阪外国語大学。

モハメド，サイド・アフメド．1991a．宮本正興訳，「なぜわたしはスワヒリ語で書くのか」『読売新聞』夕刊１９９１／１／９版，p.7.

モハメド，サイド・アフメド．1991b．宮本正興訳，「アフリカ社会における口承文芸の重要性」『月刊ａａｌａ』第77号，pp.10～11，日本アジア・アフリカ会議。

ムタヒ，カレガ．1990．小森淳子訳，「ケニアにおける言語と政治(1900－1978)」『スワヒリ＆アフリカ研究』第１号，pp.77～90，大阪外国語大学スワヒリ語研究室。

グギ・ワ・ジオンゴ．1987．宮本正興，楠瀬佳子訳，『精神の非植民地化 —— アフリカのことばと文学のために』第三書館。

田川建三．1983．「「フランス語圏」アフリカにおける言語の問題について —— ザイールでの教師体験から」『西欧∝アフリカvs日本 —— 日本人は「世界」を理解しているか』pp.9～49，第三書館。

竹村景子．1991a．「スワヒリ語作家の諸問題 —— ペニナ・ムハンドを例に見る」『アフリカ文学研究会報』No.26，pp.1～5，アフリカ文学研究会。

竹村景子．1991b．「作家の語彙と造語力 —— サイド・アフメド・モハメドの短編集から」『スワヒリ＆アフリカ研究』第２号，pp.18～47，大阪外国語大学スワヒリ語研究室。

田中克彦．1975．『言語の思想 —— 国家と民族のことば』日本放送出版協会。

田中克彦．1978．『言語からみた民族と国家』岩波書店。

田中克彦．1981．『ことばと国家』岩波書店。

富永智津子．1980．「長距離交易路と首長制社会の変容 —— パンガニルート（タンザニア）の場合」『アフリカ社会の形成と展開』 pp.377～393，東京外国語大学アジア・ア

フリカ言語文化研究所。

富永智津子．1990．「東部アフリカをめぐる王権と商業 —— ザンジバルの笛」『世界史を読む③「移動と交流」』pp.287～313，岩波書店。

豊田国夫．1964．『民族と言語の問題』錦正社。

トラッドギル，ピーター．1975．土田滋訳，『言語と社会』岩波書店。

家島彦一．1991．「東アフリカ・スワヒリ文化圏の形成過程に関する諸問題」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.41/1991，pp.101～124，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。